

平成 25 年度 小中連携授業実践記録

北海道教育大学附属札幌小学校
北海道教育大学附属函館小学校
北海道教育大学附属旭川小学校
北海道教育大学附属釧路小学校
北海道教育大学附属札幌中学校
北海道教育大学附属函館中学校
北海道教育大学附属旭川中学校
北海道教育大学附属釧路中学校

北海道教育大学

平成 25 年度 小中連携授業実践記録

目次

1. 北海道教育大学附属札幌小・中学校
学校をつなぐ～小学校英語の導入と中学校英語の接続について～ ……1
2. 北海道教育大学附属函館小・中学校
未来をつなぐ～小学生と中学生の合同英語授業からみえるもの～ …… 13
3. 北海道教育大学附属旭川小・中学校
カリキュラムをつなぐ～小学校英語と中学校「スパイラルタイム」の実践例～ …29
4. 北海道教育大学附属釧路小・中学校
子どもをつなぐ～スノーマン・プロジェクト，ICT を活用した授業の実際～ …37

学校をつなぐ ～小学校英語の導入と中学校英語の接続について～

佐々木 歩

北海道教育大学附属札幌小学校

山口 修司

北海道教育大学附属札幌中学校

1. 効果的な小中連携を目指した指導

附属札幌小・中学校では、外国語における小学校と中学校のスパイラルな学びを目指してきた。我々が考えるスパイラルな学びとは以下のようなものである。

- ①小学校で聞いたり話したりしながら音声により慣れ親しんだ語彙や表現を、中学校で読んだり書いたりする文字を使った活動につなげる。
- ②小学校で慣れ親しんだ表現の文構造等について中学校で体系的に理解し、より正しく話したり、書いたりして表現する力を育成する。

今年度より研究開発校の指定を受け、小学校英語の導入と、中学校英語におけるスパイラルタイムの導入にあたり、それぞれで新たな視点の授業実践を行った。

2. 附属札幌小学校実践事例

2.1 言葉から場面を想定する CS スキット

Creative Situational Skit (以下 CS スキット) とは、定められた対話文から、場面や状況を想像する活動である。附属札幌小学校では、教科として小学校英語の学習が始まった今年度より、高学年を中心にこの活動を取り入れている。

外国語活動や、中学校での英語科の学習では、例示された場面から、新出表現を学んだり、必要な表現を練習したりするような、「場面から言葉」の流れが一般的である。小学校英語において、「〇〇を言うことができる」といった技能的な到達目標が明確である一方、児童生徒が能動的に思考し、想像力を働かせながら学習対象に関わるのが少なくなりやすい側面もあった。

CS スキットを用いると、児童はその表現の意味を理解した段階で「どのような場面でこの表現が使われるのだろうか」ということを考えるようになる。児童の思考過程が、「言葉から場面」の流れになるのである。児童はまず、「日本語ではどんな時にこのような言葉を言うのだろうか。」と考え、思考を働かせながら活動に取り組んでいく。そのため、英語が使われている場面に思い切り浸り、表現を身に付けていくことができる。

2.2 授業実践の視点

CS スキットを授業に取り入れる際には、児童の創造性が広がりやすい表現を精選する必要がある。『Hi, Friends!』では、1 と 2 合わせて約 20 の対話表現が扱われているが、CS スキットに取り入れやすいものと、そうではないものがあると考えられる。

CS スキットとして扱いやすいもの	CS スキットとして扱いにくいもの
What's this? – It's	What time do you get up?
How many? – It's	What do you want to be?
What do you like? I like	When is your birthday?
Do you have ...?	

表現自体が短く、問う内容が抽象的であるものほど、児童は自由に場面を考えることができる。一方、表現が長く、問う内容が具体的であると、児童は例示された場面の影響を受けやすく、新しい発想がしづらくなるのである。

ただし、長い表現であれば具体性が高いというものでもない。例えば、6年生の学習の中で、『Hi, Friends 2』に登場する”Where do you want to go?”という表現がある。何の前置きもなくこの質問をしても、行ってみたい国を答えてもらうことはできない。様々な国旗や世界遺産の写真を見ながら質問することによって、はじめて「行ってみたい国はどこか。」という意味合いを持たせることができるのである。こうした点を児童に気付かせることによって、”Where do you want to go?”、“I want to go to”という表現に、児童が創造性を加味する余地を与えることができるのではないかと考える。

2.3 児童の反応

2.3.1 第6学年における実践

本校第6学年の英語の授業では、”What's this?”、“It's ----.”の対話表現を使ったCS スキットの活動に取り組んだ。この表現は、本校第5学年においてクイズを出し合う活動をとおして学習している。表現の意味は既に理解しているため、より発展的な内容として扱うこととした。

グループに分かれて場面を考える活動では、ワークシートにせりふや状況をメモする児童が多かった。メモを取る際は、英語でも日本語でも構わないことを伝えていたが、黒板を見ながらできるだけ英語で書きとろうとしていた。ただし、ここでは書いた児童本人のためのメモなので、正確さは問わない。カタカナ混じりであったり、スペルが不十分であったりするメモを見ながら、アイデアを整理していく姿が見られた。

ほとんどのグループは、旅行や日常生活の中で、自分にとって知らないものを尋ねるような場面を作っていた。しかし、中には“わかっているのに、敢えて尋ねる”という状況を考え出すグループもあった。例えば、現地学習でお弁当を食べた時に、こうしたやりとりがあったと話しながら演じていた。

お弁当を食べている場面で...

A: (友達のお弁当を覗き込みながら) What's this?
B: It's a fried chicken.... Do you want this?
A: Yes. Thank you.

こうした日常の場面を想起しながら、「こんな時にも使える。」という実感を持たせることができるのが CS スキットの良さの一つであると考えます。

また、場面の様子をよりわかりやすく表現するために、英語でたくさんのせりふを入れようとする姿も見られました。既習の表現を活用したり、英単語を調べたりしながらせりふを作っていた。児童が自ら英語に関わろうとする意欲を高めることができた。

2.3.2 第5学年における実践

本校第5学年の英語の授業では、“What ---- do you like?”、“I like ----.”の対話表現を使った CS スキットの活動に取り組んだ。この“What ---- do you like?”は、color、animal、food など、児童にとって身近な言葉を取り入れることによって、相手の好みを尋ねることができる。そのため、アイデアを膨らませやすい表現といえる。

話し合いの場面では、グループごとにホワイトボードを用意し、表現を書きこんでいけるようにした。また、その際、既習表現を書いた短冊を用意し、マグネットで貼れるようにした。書くことに自信のない児童でも、英語の文章を使って整理していくことができた。

また、教室内に様々な教具を小道具として使えるようにした。英語のピクチャーカードやポスターはもちろん、教師用の大きなコンパスや三角定規、体育帽など、児童にとって身近な用具も活躍した。こうした小道具も、発表の際には状況をわかりやすくするのに役立った。

授業の後半の発表では、児童は自分の考えた場面を楽しく演じるとともに、友達の発表にも非常に興味を示していた。これは、“What ---- do you like?”、“I like ----.”という表現自体が、それだけでは場面を作ることは難しく、前後の文脈や、----に入る言葉に注目しなければならないという特性にもよると考えられる。自分達とは全く異なる場面を発表した友達に、感心の声や拍手が送られていた。英語を話すことに苦手意識のある児童も、アイデアを出すという点で活躍の機会が与えられる。また、自分が発表したり、友達の発表を聞いたりしていく中で、自然と表現により慣れ親しむことができた。

2.4 評価の観点

外国語活動の評価の観点に CS スキットを照らし合わせてみると、「言語や文化への気付き」として、いろいろな場面を考えたり、友達の発想の良さに気付いたりしたことを価値付けたい。また、場面を演じていく中で、既習の表現を活用していく姿も、言語に慣れ親しんだ姿として評価できる。ここで使われる英語は、コミュニケーションツールというよりも、思考の材料という側面が強い。そのため、コミュニケーションの態度を評価するのは難しいと考えられる。

また、児童間でも相互評価をさせ、互いの発想を評価し合うことが望ましい。評価の観点を明らかにしながら見合うことにより、気付きの質が高まることも期待できる。

現在検討中である小学校英語としての評価の視点は、これまでの外国語活動の評価の観点とは異なる可能性も十分にある。選んだ場面の適切さや、話す英語の流暢さなども評価に含めることができると、より実際の使用場面を意識した活動を目指すことができる。

2.5 成果と課題

CS スキットは、児童のアイデアを大きく活動に取り入れることから、児童の意欲を引き出し、自ら英語に向かおうとする態度を育てることができる。一方で、活動の際に指導者が留意すべき点も明らかになってきた。

一つ目は、学習の発展的内容として扱うことを原則とする点である。児童が表現の意味を十分に理解できてい

ない状況で活動に入っても、アイデアを膨らませることは難しい。「CS スキットのための表現の学習」になっては本末転倒である。単元の最後に取り入れるなどの工夫が必要になる。

二つ目は、扱う表現の精選である。ネイティブスピーカーではない担任にとって、表現に児童がアイデアを膨らませる余地があるのか、児童が考えた場面が本当にふさわしいかどうかを判断することは、容易ではない。ALT に協力をしてもらいながら、指導者自身が表現を十分に理解し、児童の視野を広げられるようにする必要がある。

三つ目は、英語学習としての表現の機会を保障していくことである。CS スキットでは、児童一人一人が英語を話す時間が多くない。活動の中で児童が考える場面でも、使われるのは日本語である。繰り返し声に出すことによって技能面の向上を目指す小学校英語のねらいを考慮すると、CS スキットに偏るのではなく、意図的に対話を取り入れ、バランスの良い授業を構築する必要がある。

CS スキットは、小学校の英語学習にとって、画期的な試みと言えるだろう。児童の創造性や学習意欲を引き出すという良さを生かしながら、今後も実践を重ね、改善していく。

3. 附属札幌中学校実践事例

3.1 実践の概要とねらい

北海道教育大学附属札幌中学校では、前述の附属札幌小学校における実践を踏まえ、中学校英語への円滑な接続を意識した指導実践を行っている。その一つが、小学校英語の指導方法を取り入れたり、学習内容を振り返ったりしながら、らせん的な学びの連続性を意図した「スパイラルタイム」である。スパイラルタイムでは、「話すこと」、「聞くこと」を中心としながら、小学校で培ったコミュニケーション能力の素地を生かした活動を行うだけでなく、文字や文法の正確性にも焦点をあてることで、表現の質を高めることや4技能の総合的な育成を図っている。

今年度、本校英語科のスパイラルタイムにおいて、dictogloss の手法を取り入れた実践を行った。本実践では、あるまとまった文章を聞いて概要を捉えることと、その文章を正しく書いて再生するために既習の語彙や文法知識を活用することをねらいとした。本実践は、伝える内容に重きをおく小学校英語と、内容とともに正確性にも重きをおく中学校英語との円滑な接続を意識した活動として有効であると考えた。

3.2 dictogloss とは

Grammar Dictation (Ruth Wajnryb, 1990, Oxford University Press)によると、dictogloss は以下のように定義されている。

- a. A short, dense text is read (twice) to the learners at normal speed
- b. As it is being read, the learners jot down familiar words and phrases
- c. Working in small groups, the learners pool their battered texts and strive to reconstruct a version of the text from their shared resources
- d. Each group of students produces its own reconstructed version, aiming at grammatical accuracy and textual cohesion but not at replicating the original text
- e. The various versions are analyzed and compared and the students refine their own texts in the light of the shared scrutiny and discussion

このように基本的には、全体に対して短い英文が2度読まれ、生徒はメモをしながら聞き取りを行う。それから、グループになり、仲間と話し合いながら文法の正確性や、前後の内容的整合性を意識して元の英文を再構成する活動である。しかし、本実践において、上記のねらいや生徒の実態を考慮し、読まれる英文の回数や形式に手を加えている。具体的には以下のとおりである。

3.3 本実践の具体的展開

上述したように、本来の dictogloss とはねらいや方法が異なる部分もあるが、意図したものは、小学校英語で音声中心に身につけてきた言語感覚を生かしながら、語彙や文法の正確性にも目を向け、より質の高い自己表現へとつなげることである。文字に頼ることなく自然な速さで読まれる英文を聞いて理解する力や、理解した内容や前後の文脈から、意味的・文法的に正しい英文を推測しながら書いて表現する力の育成をめざした。

また、使用した英文については、直近に行った定期テストの出題内容から、生徒の正答率が低いと思われる語彙や表現を意識的に盛り込んだ。特に、いわゆる3単現の語尾変化を中心的文法項目として取り上げた。そして、

内容は教科横断的な学びの第一歩として、数学的な要素を含んだ文章題とした。

【使用した英文原稿】

- 1 This is Takeshi. He likes comic books. He wants some new ones.
- 2 So he goes to a book store. It's a very big store! They have many kinds of comic books.
- 3 "Conan" is Takeshi's favorite. He has 30 dollars. One comic book is three dollars.
- 4 But he also wants a CD. It's 12 dollars. How many comic books can he get?

【授業の展開】

1. 4人1組になり、英文を聞く順番を決める。
2. 生徒がグループから一人ずつ廊下に出てきて、教師が3回、口頭で英文を伝える。その際、教師はその様子を表す絵カードを見せながら話す。
3. 生徒はメモをせずに英文を暗記し、各自、絵カードを持って自分のグループに戻る。仲間にカードを見せながら、聞いてきた英文を口頭で伝える。
4. 英文を聞いたグループの他のメンバーは、その英文を文字に書き起こす。
5. 4人目が終了した時点で一度、教師が黒板に未習語等のヒントを示し、仲間と個々の英文を比較検討しながら、じっくりと再構成するよう促す。
6. 生徒は1回目と担当を変え、2周目の聞き取りを行う。
7. 2周目を終え、各グループが英文をほぼ完成させた時点で、教師が黒板に絵カードを貼り、全体に対してもう一度、英文を読む。
8. 教師は黒板に拡大した原文を掲示し、生徒は自分たちの英文と文章題の答えをチェックする。
9. 最後に、グループで文章題の解法を、筋道を立てながら短い英文にまとめる。
10. グループの代表生徒が、原稿を見ずに全体の前で解法を発表する。

4. 本実践における生徒の姿と成果

4.1 生徒の姿と期待される効果

本実践において、生徒たちは一人一人に役割が与えられた。グループのために確実に聞きとろうと、教師が話す英文を小声でシャドウイングしながら聞く生徒や、教師が話し終わる度にその場でリピートする生徒が多数見られた。そして、教室の仲間の元に戻り、カードを見せながら聞いた英文の音声や内容を懸命に再生しようとしていたが、こうした行為はいわゆるリテンション力（聞き取った英文を記憶に保持しておく能力）を強化することに役立つ。文字に頼ることなく、小学校で培ってきた音声を媒体としたコミュニケーション能力の素地を生かした活動として有効であった。

一方、グループの聞き手側の生徒たちは、仲間の話す英文を聞きながらそれを一斉に文字に書き起こそうとして

いた。英語を書くことが苦手な生徒も隣の生徒に綴りを見せてもらいながら写すだけでなく、自分が聞き取れた情報を積極的に共有しようとする姿が見られた。普段、全体の前では発言や発表が少ない生徒も、グループの中では積極的に自らの考えを発信し、問題解決に貢献しようとする意欲や態度の高まりが見られた。外国語活動を経験してきた児童・生徒の望ましい変化として、英語でのやりとりに限らず、コミュニケーション能力の向上を挙げる教師も少なくない。中学校においても、英語によるコミュニケーション活動はもちろんであるが、こうした仲間との協同的な学びの場を数多く取り入れていくことが重要であると感じた。

4.2 内容重視と形式重視の融合

活動中に、ほぼすべてのグループで正確性に目を向ける生徒が表れ、冠詞の有無や一般動詞の語尾変化の正否について話し合われた。文字にして書く活動を取り入れることで、話し言葉では流されてしまう、こうした細かい誤りに気付くことができるのである。そして、この「気づき」の経験が、別の機会に自分で英語を発話したり、筆記したりする際にモニターとして発揮される。正確性に重きをおき、表現の質の向上を目的の一つとする中学校英語において、こうしたモニターの機能を高めることは欠かせない。

また、語彙や文法知識を生かしながら正しい英文を再構成するだけでなく、前後の文脈などからわからない部分を補おうとする生徒も多数見られた。先述のとおり、内容は数学的な要素を含む文章題であるため、その筋道に合うように、論理的に思考しながら英文を修正していたのである。わかっている情報からわからない単語や文の意味を推察する力や、物事を論理的に考え、理路整然と表現する力はコミュニケーションを成立させる上で重要である。以上のような姿は、生徒の知識の定着や言語運用能力の向上に直接的につながるものであり、大きな成果といえる。

4.3 自己表現への発展

今回は与えられた英文を再構成するだけではなく、原文の要約の要素を取り入れた。完成した英文の内容を取捨選択しながら短くまとめて表現することにより、原文に含まれる語彙や文法を応用しながら、自己表現につなげる効果が期待できる。普段の授業において、教科書の内容を要約する活動を継続して取り入れているが、与えられた英文を音読し、暗唱するだけでなく、そうした活動から内在化された語彙や文法を自己表現につなげていくためには、もう一段階のステップが必要である。その一つとして、要約を行うことが有効ではないかと考えた。本実践においてもすべてのグループにおいて、仲間と協力しながら必要な情報のみを抽出し、論理的に思考しながら道理に合った英文が生み出されていた。

5. 本実践における課題と今後の方向性

本実践において、2通りの英文の再生方法が見られた。一つは上で述べたような、発音を何度も繰り返し、音声情報のみとして伝えようとする方法である。もう一つは、英文の内容をとらえ、日本語で伝えてしまう方法である。音声を聞こえたままに再生する力も、聞こえた英文の意味や概要をとらえ理解する力もどちらも重要であるが、総合的な英語力の向上においては両者の融合が欠かせない。日常の言語によるコミュニケーションにおいて、意味処理のみ、あるいは統語処理のみに終始することはありえない。いつでも、聞こえた音声から意味内容が頭の中でイメージ化され、更にイメージ化された意味内容から、音声や文字に瞬時に変換・発信するといった言語の自動化が必須である。日頃から、音読・暗唱の練習を繰り返す中で、音、文字、意味をつなげる力を継続的に育成していく

ことが重要であることを再認識した。

また本活動では、生徒が英語を話す機会が極端に少ないといえる。今回、本校第1学年の生徒を対象として実践を行ったため、英文の再構成に関わるやりとりは日本語で行われた。これを例えば、“He(The teacher) said, ‘...’” や、“I think it’s(this word should be) ...”、または、“Really? Why?”や“Because the 主語 is So ‘play’ is(should be) ‘plays’.”など、シンプルな表現でも英語で行うことができれば更にコミュニケーション能力育成の効果が高まるだろう。

6. まとめ

小学校英語の導入には、早くから英語嫌いを生んでしまうことに対する懸念など、不安視する声も少なくない。同時に、新学習指導要領下における中学校英語も過渡期を迎え、変革が求められている。そのような状況の中で、児童・生徒のよりよい成長のために何が必要なのか、どういった方法があるのか、ということを探索していかなければならない。

今年度、「小学校英語の導入と中学校との接続に関する研究」を開始し、以上のような実践を行ってきた。小学校においては、歌やチャンツなどの音声中心の活動だけでなく、5・6年生を対象にCSスキットのよう思考力や想像力を刺激する活動を取り入れることで、高学年の児童生徒の知的好奇心に応え、英語に対する興味・関心を高める実践を確立することができた。そして、中学校においては、文法訳読や読み書きに偏重することなく、音声から文字への自然な接続が図られ、流暢さと正確さがバランスよく向上させることができる dictogloss 等の活用方法が見えてきた。本研究はまだまだ始まったばかりである。今後も、児童・生徒の英語に対する興味・関心を高めながら、コミュニケーション能力の伸長に寄与する効果的な活動を模索し、実践を続けていきたい。

参考文献

文部科学省（2008）『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』東洋館出版社

文部科学省（2008）『中学校学習指導要領解説 外国語編』開隆堂

文部科学省（2012）『Hi, friends!』

直山木綿子（編著）（2011）『小学校外国語活動モデル事例集』教育研究開発所

萬谷隆一・直山木綿子・卯城祐司・石塚博規・中村香恵子・中村典生（編著）（2011）『小中連携 Q&A と実践』開隆堂

Wajnryb, R. (1990). *Grammar Dictation*. Oxford: Oxford University Press.

小学校第6学年 英語科 学習指導案

1. 単元名 どんな場面なのか考えよう What's this?
2. ねらい A : What's this? B : It's ----.
 の会話文を使った状況を考える活動を通し、同じ表現が様々な状況で使えることに気付き、積極的に使える場面を見つけようとする。

3. 展開

学習内容・活動	留意点
<p>○ Greetings ○ Review</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> <p style="text-align: center;">A : What's this? B : It's ----.</p> </div> <p>○ Quiz What's this? It's a pen case. ・5年生では、クイズを出すときにこう言ったよ。 ・他にも使えるときがあるのかな。</p> <p>○ Let's have a conversation.</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin: 10px 0;"> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; width: 30%;"> <p style="text-align: center;">【状況から】</p> <p>旅行先のお店で・・・ 友達の家で・・・ お母さんにテストを見せたら・・・</p> </div> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; width: 30%;"> <p style="text-align: center;">【返答】</p> <p>It's a durian. It's an eraser. It's my paper.</p> </div> </div> <p>・グループごとに考えよう。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> <p style="text-align: center;">どんな時に使えるかな。 日本語で「これは何？」と聞くときは・・・</p> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin: 10px 0;"> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; width: 20%;"> <p style="text-align: center;">状況から 考えよう</p> </div> <div style="text-align: center;"> <p>使われる状況の 多様性に気付く</p> </div> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; width: 20%;"> <p style="text-align: center;">表現から 考えよう</p> </div> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin: 10px 0;"> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; width: 20%;"> <p style="text-align: center;">これまでに学 習した表現か ら探してみよ う。</p> </div> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; width: 40%; text-align: center;"> <p>返答の工夫 会話を増やす工夫</p> </div> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; width: 20%;"> <p style="text-align: center;">もっと会話を付 け足さないと、伝 わらないよ。</p> </div> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> <p style="text-align: center;">自分達が考えた状況を英語で演じることができた。 いろいろな状況で使えることがわかったよ。</p> </div> <p>○ Greetings</p>	<p style="text-align: center;">留意点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・5学年で扱ったクイズ形式の対話を行い、表現の使われ方を想起させたところで、表現自体の本来の意味を確認し、使われる状況を考えさせる。 ・状況を考え出しにくい児童に対しては、日常の場面や、返答の仕方などからヒントを得られるよう支援して行く。 ・必要に応じて、メモを取りながら話し合わせることによって、考えを整理させていく。 ・場面をよりわかりやすく演じるために、“What's this?” “It's ----.”以外の表現も積極的に使おうとしている児童を価値付ける。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> <p style="text-align: center;">◆評価◆</p> <p>会話を創作する活動を通し、状況を考えたり、これまで学習した表現を活用したりしながら工夫を生み出している。</p> </div>

小学校第5学年 英語科 学習指導案

1. 単元名 What do you like?

2. ねらい A: What () do you like? B: I like _____.

…の会話文を使った状況を考える活動を通し、これまでに学習した言葉や文を加えることで会話を膨らませることができることに気づき、既習を使って英語の表現を工夫する楽しさを味わう。

3. 展開

学習内容・活動	留意点
<p>○ Greetings</p> <p>○ Let's try to say.</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p style="text-align: center;">A: What () do you like? B: I like _____.</p> </div> <p>○ Let's chant.</p> <p style="margin-left: 20px;">What color ~? What food ~? What animal ~?</p> <ul style="list-style-type: none"> ・状況や言葉を考えると会話が作れるよ。 ・自分たちでも考えてみよう。 <p>○ Let's have a conversation.</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center; margin: 10px 0;"> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; text-align: center;"> <p>【質問】</p> <p>What sport ~? What color ~? What food ~?</p> </div> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; text-align: center;"> <p>【状況】</p> <p>新しい友達と… 買い物中に… レストランで…</p> </div> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; text-align: center;"> <p>【返答】</p> <p>I like baseball. I like green. I like ice cream.</p> </div> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・グループごとに考えよう ・みんなが参加できるような会話にしたいね <div style="border: 2px solid black; padding: 5px; text-align: center; margin: 10px 0;"> <p>どんな会話にしようかな。 もっと会話を広げたいな</p> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center; margin: 10px 0;"> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; text-align: center;"> <p>状況から 考えよう</p> </div> <div style="text-align: center;"> <p>基本文をもとに 会話を創り出す</p> </div> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; text-align: center;"> <p>表現から 考えよう</p> </div> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center; margin: 10px 0;"> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; text-align: center;"> <p>これまでに 学習した表 現から探 してみよう。</p> </div> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; text-align: center;"> <p>返答の工夫 会話を増やす工夫</p> </div> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; text-align: center;"> <p>もっと楽 しい会話を 広げたいな。</p> </div> </div> <div style="border: 2px solid black; padding: 5px; text-align: center; margin: 10px 0;"> <p>これまで学んだ英語を使って会話が出来たよ。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・次回は発表し合おう。発表が楽しみだ。 <p>○ Greetings</p>	<p style="text-align: center;">留意点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・チャンツで表現を広げるきっかけとする。状況の想起が具体的であるほど、子どもの表現も生き生きとした会話になるだろうと考える。よって、会話を交わす状況に思いを馳せる時間を十分にとり、会話作りへの意欲を高める。 ・問題の多くは「単語が分からない」であろう。「これは英語でどうやっているのかな」「新しい表現を知りたい」という子どもの知的好奇心を大切にしつつも、これまで学んだ表現を使って工夫する姿を価値付けていく。これまでの学習で使ったカードも積極的に活用する姿も広げていきたい。 ・学習した文を使うだけでなく、挨拶や感嘆詞などの表現も生かしながら会話を膨らまる子どもの姿を価値付けていく。経験を総動員して工夫を重ねる姿を求めたい。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center; margin: 10px 0;"> <p>◆評価◆</p> </div> <p>会話を創作する活動を通し、状況を考えたり、これまで学習した表現を活用したりしながら工夫を生み出している。</p>

資料2 中学校実践事例

1 本時の目標

3人称を主語とする英文について、まとまりのある英文を聞いて概要を理解したり、be動詞と一般動詞の使い分けや、一般動詞の語尾につく”s/es”に注意しながら、解法を論理的に英語で正しく書いたりすることができる。

2 展開

流れ	○生徒の学習活動	・教師のかかわり
振り返る (05分) つかむ	○出題内容などを想起する。 *英語は3単現の表現が中心に出題されていた。 *数学はけっこうできた。 *英語だと数学の問題はどのようになるのだろうか。	・定期試験について振り返るよう促す。 ・他の教科の学習と合わせて、英語の学習を行うことを提案する。
【学習課題】英語を使って数学の問題に挑戦しよう！		
(10分)	○四人一組になり、机を移動する。 ○ルールを理解し、ペンやワークシートなど、活動の準備をする。 《言語活動》	・ルールを説明する。 ・4人グループで行う ・それぞれが順番に、別々の英文を聞いてきて、そこでもらったカードを使いながら英語で仲間にその内容を伝える。 ・仲間はそれをワークシートにメモする。 ・答えは英語で、筋道を立てて書く。
焦点化する 広げる (30分)	○一人目が英文を聞き、カードをもらって班に戻り、仲間に伝える。 *何と言っているのかな。 *どんな内容だろうか。 *つづりはどうだったかな。 ○4人が続けて行き、メモをとりながら、全員で「解法」の英文を完成させていく。 *これはbe動詞の文になるのかな。 *こっちは一般動詞だけど、主語が三人称だから”s/es”がいるのかな。	・各班の一人目から開始の指示を出す。 ・一人目にのみ英文を伝え、カードを渡す。 ・4人が終わったら、一度、文法や語彙の正しい使用に目を向けるよう指示する。 ・もう一度ずつ、聞く機会を与える。 ※担当を変えてもよいことを伝える。 ・黒板に英文を掲示し、概要と要点の確認を行う。 ・解法を記すワークシートを班に一枚、配り、協力して英文を作るよう指示する。 ◆be動詞と一般動詞の使い分け、一般動詞の”s/es”について、音声、文字ともに正しく操作できているか。
まとめる	○教師の説明を聞き、自分の英文と見比べる。 ○他の班の解法を聞きながら、解やそこにいたる英文の内容面と、3単現の”s/es”の正確な使用などの構造面を確認する。 《課題解決の姿》 英語で数学的問題を解くことを通して、3人称を主語とする英文について、be動詞と一般動詞の使い分けや、一般動詞の語尾変化に注意しながら、英文を聞いて理解したり、正しく書いたりすることが	・2つの班に、解法を発表するよう促す。 ※数学的な筋道を立てた説明を意識し、論理的に組み立てるよう促す。 ※作った英文の原稿を見ないで発表するよう促す。
(50分)	《振り返り》 ◇一般動詞を含む第三者の紹介を正しく、メールや手紙などでも行うことができそうだ。	・ワークシートに振り返りを記述するよう促す。 ・次回から、本時で出てきたcanを用いた表現を扱うことを伝える。

3 本時の評価

3人称を主語とする英文について、まとまりのある英文を聞いて概要を理解したり、be動詞と一般動詞の使い分けや、一般動詞の語尾につく”s/es”に注意しながら、解法を論理的に英語で正しく書いたりすることができたか、生徒の活動の様子やワークシートの記述内容から見取る。

未来をつなぐ ～小学生と中学生の合同英語授業からみえるもの～

伊藤 光

北海道教育大学附属函館小学校

宮野 健

北海道教育大学附属函館中学校

1. はじめに

平成25年11月11日（月） 附属函館中学校体育館において

「Let's Enjoy Shopping at Fuzoku Market!」

小5（39名）と中1（40名）による合同授業を実施。

小中の円滑な接続を目指すために、小中連携を図ることが大切だと言われている。連携の在り方・一方策として、小学生と中学生が交流する方法も考えられるが、小学生と中学生が交流することに、どのような良さがあるのか。小学生よりも英語の学習が進んでいる中学生にとってどのようなメリットがあるのか。本稿では、それらについての一つの事例を紹介する。

2. 小中合同授業を実施した理由

外国語活動の導入により、子供たちに次のような望ましい変化が見られるといわれている。

- 聞く力が高まった。
- 英語の発音がよくなった。
- 語彙が増えている。
- アクティビティに積極的である。

しかし一方で、外国語活動導入に伴うマイナス面も見られるようである。

- 中学校入学時にすでに、英語力の差がついている。
- 英語嫌いが増えている。

その理由として、次のようなことが考えられる。

- ・ 児童の知的好奇心を満足させていないのでは？
(もっと学びたい、学んだことを確かめたい、文字に触れたい など)
- ・ 中学校でコミュニケーション能力の素地を生かしていないのでは？
(小中それぞれの英語は別物だと思われている、小中で学びが途切れている など)

これらの課題を解決していくための手立てについては、「北海道教育大学附属学校研究開発学校プロジェクト」で研究を始めたところであり、研究の概要については札幌小・中学校の頁を参照されたい。

研究の視点の一つに「効果的な小中連携の在り方」があり、小中連携を図るための「手立ての一つ」として「児童生徒間交流」があるが、実はこれについて本学附属学校においては過去の実践事例があまりなく、道内・全国でも事例として多く見られるわけではなかった。そこで今回は「児童生徒間交流」の一つの形として小学生と中学生による英語の合同授業を行うことで、児童生徒にどのような変容が見られるのか、合同授業は手立てとして効果的かどうかを検証する価値があると考えた。

折しも函館小・中学校では、次のような実態があった。

- 児童生徒が英語で互いを尊重するための言葉、あいさつやお礼などを伝えきれていない。
- 状況に合わせて既習の英語を活用することが十分にできていない。

そこで小中合同授業を行うことにより、次のような変容が見られると考えた。

《 仮説 》

1. 児童生徒の英語学習への意欲が高まる。
2. 児童生徒の積極的なコミュニケーションにより、互いを尊重する態度が涵養される。

変容についてももう少し具体的に述べると、次の通りである。

小学生と中学生が合同で学習を行うことにより、

小学生は…

- 普段接することのない仲間にも英語で伝えることができることを実感したり、コミュニケーションを図る楽しさを味わったりしながら、学習への意欲をいっそう高めることができる。
- 協同学習の価値に気付き、人とのかかわりを大切にすることができる。

中学生は…

- 小学校で触れた内容を振り返り、言語学習の楽しいイメージを想起できる。
- 英語を実際に運用することで、英語を学ぶ価値に気付くことができる。

3. 小中合同授業の位置付けと授業づくり

仮説の検証を行うため、小中合同授業を次のように位置付けた。

児童生徒の英語学習へのいっそうの動機付けを図り、

☆ 小学生にとっては、コミュニケーションを図る楽しさを味わいながら、相手を尊重することの大切さを体験的に学ぶ場。

☆ 中学生にとっては、既習事項を（主となる言語材料だけでなく、課題解決のために必要となる周辺の言語材料も）活用しながら、どんな相手とでも積極的にコミュニケーションを図る・継続することの大変さや大切さを体験的に学ぶ場。

上記のような学びの場とするために、次の点を考慮しつつ授業をつくった。

<仮説1に関わって>

児童生徒の英語学習への意欲が高まるようにするために…

☆ 児童生徒が主体的に学びを展開できるようにするための魅力的なコミュニケーションの場面 / 言語の使用場面として「買物」場面を設定する。

<仮説2に関わって>

児童生徒の積極的なコミュニケーションにより、互いを尊重する態度が涵養されるようにするために…

☆ コミュニケーションを図る相手を、同じ附属の先輩・後輩である小学生・中学生とする。

☆ 英語によるあいさつやお礼を積極的に行うことを働きかける。

☆ 状況や相手の様子に合わせて、既習の英語を活用したり別の英語に言い換えて伝えたりするよう促す。

単元計画については、本稿最後に添付してある資料をご覧ください。

4. 中学校英語科としての授業の位置付け・目標

本稿の初めに「小学生よりも英語の学習が進んでいる中学生にとってどのようなメリットがあるのか」と述べたが、小学生だけでなく中学生にとってもメリットがある合同授業をつくり出すためには、中学校英語科としての授業の位置付けや目標も明確にする必要がある。

中学校英語科では、本単元を次のように位置付けた。

☆ 小学校英語の活動内容を振り返ったり、扱った表現を学び直したりする時間である「スパイラルタイム」とする。

※ 「スパイラルタイム」については、研究開発学校の研究概要を参照。

現中学1年生は、小学生のときに外国語活動を2年間学習している。その中で慣れ親しんだ買物の場面ではあるが、新たな英語表現を学習した中学生として、発達段階にふさわしい言語の使用場面を設定することで、より実践的となり、言語運用能力を高めるにはふさわしい単元になる。また、中学1年生ということもあり、友達や小学生と買物を体験的に学習することによって、あいさつやお礼を交えながらコミュニケーションを図る楽しさを味わうことができる単元でもある。

しかしよく言われているように、合同授業の場合は、小中それぞれの目標を意識しなければ単なるイベントで終わってしまう。合同授業において、中学校1年生が小学生と一緒に授業の目標は何なのか、授業者が明確な意図をもつ必要がある。

そこで、本単元では中学生にとっての授業の目標を次のように設定した。

☆ 実践的な英語力を育成するために、相手の意向を理解しコミュニケーションを継続させる方法を探りながら、初歩的な英語を用いて積極的にコミュニケーションを図ることができるようにする。

グローバル化が進行する社会においては、いろいろな相手と英語でコミュニケーションを図ることが求められる。例えば、自分と学年や年齢が異なる人、話す英語に特徴のある人、いわゆる英語力に自分と差がある人、などである。

近い将来、これらの人たちと効果的にコミュニケーションを図るためには、いろいろな人とコミュニケーションを図る経験を積む必要がある。というのも、普段接している友達とは言葉足らずでもわかり合えてしまったり、あいさつやお礼の大切さを実感しづらかったりするからである。

しかし、そのような機会は中学校3年間の中では、容易に設定できるものではない。そこで「スパイラルタイム」という時間を利用して、まだ英語を学び始めたばかりの小学生との合同授業という方法で、前述の目標を達成できるように単元を構想した。

5. 小学校から見た小中合同授業の成果と課題

実際に合同授業を行い、その後の事後協議において、次にあげるような成果と課題を見出すことができた。

まず成果としては、次のような点があげられた。

- 普段接することのない仲間と、あいさつやお礼を交えながら、英語で伝え合うことができた。
- ある程度、場面や状況に応じて英語を選びながら、伝え合うことができた。
- 班ごとに設定した目的（ミネストローネを作るための食材・調味料を買い集めようなど）に向かって、班で手分けしながら英語を用いる活動をすることができた。
- 相手意識の段階的な広がり（学習への意欲の高まり）につながる授業であった。
- 覚えるフレーズが買い手に必要な分だけで済んだので、売り手に必要なフレーズを覚えることや状況に応じた対応力を身につけるといった負担感を減らすことができた。
- 日本語を使いたくなかった小学生が、中学生に“**In English, please.**”と促されて、知っている英語でなんとかしたり、友達同士で協力して英語を発したりせざるを得ない状況を生み出すことができた。

一方で課題と解決のための方策としては、次のような点があげられた。

- 自分の言いたいことは言えていたが、相手（中学生）の言葉に対する反応が弱かった。

これは、中学生相手という心的なプレッシャーの影響があったと考える。粘り強くコミュニケーションを続けるためには中学生によるリードが必要だったのかもしれない。

コミュニケーションを図る楽しさをさらに味わうために、相手の言ったことにうまく反応できないときの対応方法や、相手の言ったことへの返し方も覚える必要があった。

- あらかじめ用意していたセンテンスは話せていたが、子どもの自主性や創造性のある発言があるとよかった。

これについては、例えば、会話の終わりの別れ際などに **small talk** を入れるなどの方法が考えられる。中学生が言った“**Have a nice day!**”に対する“**You too!**”（応答）、さよならの前に中学生が言う“**Do you like cabbages?**”に対する“**Yes!**”などである。こうすることにより、既習事項、知識を活用しながら、積極的にコミュニケーションを図ろうとする姿への変容が期待できる。

- お店の看板に I have onions and carrots.と書かれている場合でも小学生が“Do you have onions?”と尋ねていたのは不自然であった。初めから“～, please.”というのが普通である。

決まりきったフレーズを必ず使うのではなく、場面や状況に応じて使い分ける力をつける必要があった。

- コミュニケーションの質としては目と目が向き合っているのが望ましく、少なくとも店でやり取りするときを使う英語は自動化されていなければならない。

本單元では、子どもが「自分たち（グループ）はこれらの料理を作りたいから、～を買い集めるんだ」という思いをもち、子ども自身が設定したねらいを達成しようとする中で、コミュニケーションを図る楽しさを味わえるようにすることを重視した。しかし、そのために必要な英語表現については「慣れ親しみ」を超える必要があった。

6. 中学校から見た小中合同授業の成果と課題

中学校では、その後の研究協議において、次にあげるような成果と課題を見いだすことができた。

まず成果として、次のような点があげられた。

- 普段接することのない仲間と、あいさつやお礼を交えながら、英語で伝えあうことができた。
- コミュニケーションの方略を考え、より実践的な場面に出会う経験をした。
- English, please. と小学生に指示したことにより、自分たちも最後まで英語で対応しなければならないという、よい緊張感を保つことができた。
- 英語を学習し始めたばかりの小学生に英語で負けられないという思いが芽生え、意欲につながった。

一方で課題として、次のような点があげられた。

- 小学生が言ったことに対して、中学生が既習の表現で対応していたが、正確さに欠ける部分があった。
- 3人グループの中には、小学生へ対応する役割が固定化していたグループがあった。
- 小中生が授業で初めて対面するウォームアップにもう少し工夫があってもよかった。
- 授業の終末の感想を交流する場面では、もっと児童生徒同士の交流があればよかった。

- 普通のやり取りプラスもう一工夫する要素があってもよい。(例えば、予定にないが自分の店の商品を売り切るようにする。これにより、客である小学生を店に呼び込むような積極的な呼びかけがでてくるのではないか。)

7. 今後の可能性

今後の可能性としては、以下の4点があげられた。

☆ 買物以外のコミュニケーションの場面 / 言語の使用場面での実践・検証。

合同授業は買物場面以外でも効果的に行えるかどうかの検証である。

☆ 学年を変えての実践。(例えば新小4と新中1)

例えば、現在の小3と小6が小4と中1になったときの実践が考えられる。両者とも買物場面は未習であり、中学生との交流を中学年で行うことは可能かどうか検証するためである。なお、小学生単独での買物場面の学習は本年度小学校4年生で行っており、一定の成果が得られている。

☆ 小学生と中学生がペアで買物をする形での実践。

小学生と中学生がペアで買物をする、児童生徒同士による教える・教えられる(学び合い)の関係で活動できそうである。

☆ 大規模の学級同士による合同授業の事例蓄積。

北海道内でもこれまで小中合同授業の実践例はあったが、それらはたいてい小規模の学級・学年同士によるものであった。今回は比較的大規模の学級同士(小学生39名、中学生40名)でも行うことができ、事例として蓄積していけるという可能性を見いだせる試みであった。

8. おわりに

小中合同授業を実施した理由は、次の通りであった。

小中合同授業を実施した理由

- ・ 児童生徒の英語学習への意欲が高まると考えたため。(言語習得への動機付け)
- ・ 児童生徒の積極的なコミュニケーションにより、互いを尊重する態度が涵養される機会であると考えたため。

授業後の感想として、小学生は以下のようなことを述べていた。

- ・ 普段接することのない中学生と英語でコミュニケーションをとれた。
- ・ 間違ってしまったところもあったけど、楽しかった。
- ・ 最初はドキドキしたが、実際にやってみると中学生がやさしく接してくれたので楽しくなった。

また、中学生は次のようなことを述べていた。

- ・ いつもと違う学年の仲間とかかわったことで、普段通じている言葉が簡単に通じない難しさがわかった。
- ・ 小学生と学習したことで、自分の英語が通じない場合に言い換えが必要になるなど、教えられることがあった。
- ・ 緊張した。小学生に負けられないと思ったから、自分の英語力でなんとかしようとした。

本時における児童生徒の様子と、感想を踏まえつつ、本実践によって次のようなことが明らかになった。

- 児童生徒の英語学習への意欲は高まったといえる。
- 互いを尊重する態度が涵養される機会とはなっていたが、より積極的にコミュニケーションを図るための方策はまだ残されていた。

英語学習への意欲は、本時の児童生徒の様子や感想からも高まったといえる。小学生にとってはコミュニケーションを図る楽しさを味わう絶好の機会となっていた。中学生にとっても、良い意味でのプレッシャーを感じながら、コミュニケーションへの積極性について考える良い機会となっていた。この実践を通して、合同授業をスパイラルタイムの中に位置付けていくための原型をつくりだすことができた。一方で、本時は児童生徒同士、互いを尊重する態度が涵養される機会となっていたと思うが、より積極的にコミュニケーションを図る（継続する）ための方策はまだ残されていることがわかった。

本稿で紹介した小中合同授業の実践は、小中連携の在り方を考えるためのきっかけにすぎない。今後も、小学校と中学校の円滑な接続を目指した効果的な小中連携の在り方を考えつつ、研究開発の推進に努める所存である。

「Let's Enjoy Shopping at Fuzoku Market!」(小 5時間 / 中 3時間扱い)

授業者 伊藤 光, 宮野 健

日 時 平成25年11月11日(月) 第2教時

児 童 北海道教育大学附属函館小学校 第5学年1組 男子20名 女子19名

生 徒 北海道教育大学附属函館中学校 第1学年B組 男子21名 女子29名

《 単元について 》

本単元では、児童生徒の英語学習への意欲を高め、英語で聞いたり話したりすることを通して互いを尊重する態度が涵養されるよう、小学生と中学生が合同で学習する場を設ける。また本実践を通して、英語学習における小中連携の在り方や小中一貫カリキュラム開発に関わる検証をする。

【 小学校 】

目標：欲しいものとそれらの値段を尋ねたり答えたりするための基本的な英語表現を用いながら、コミュニケーションを図る楽しさを味わうことができるようにする。

本単元では、相手に欲しいものとそれらの値段を英語で尋ねたり答えたりする、買物の場面を想定したコミュニケーション活動を行う。

買物の場面で必要となる英語の音声や基本的な表現に慣れ親しむことができるよう、料理に必要な食材や調味料を表す英語や、欲しいものを伝えたり値段を尋ねたりするための英語を繰り返し聞いたり話したりすることができるようなロールプレイングを取り入れる。一連の活動を通してたくさんの友達・中学生と、あいさつやお礼を交えながらコミュニケーションを図る楽しさを味わうことができる単元である。

【 中学校 】

目標：商店での買物の場面において、相手の思いを理解しコミュニケーションを継続させる方法を探りながら、初歩的な英語を用いて積極的にコミュニケーションを図ることができるようにする。

本単元は、小学校英語の活動内容を振り返ったり、扱った表現を学び直したりする時間である「スパイラルタイム」の1時間として位置づける。

小学生のときに外国語活動(平成23・24年度)で慣れ親しんだ買物の場面ではあるが、新たな英語表現を学習した中学生として発達段階にふさわしい言語の使用場面を設定することで、より実践的となり、言語運用能力を高めるにはふさわしい単元である。

また、友達や小学生と買物を体験的に学習することによって、あいさつやお礼を交えながらコミュニケーションを図る楽しさを味わうことができる単元でもある。

《 単元と研究のかかわり 》

【 小学校 】

「小学校英語の導入と中学校との接続に関する研究」および学校研究「初等教育におけるアクティブ・ラーニングの実践」とのかかわり

本単元では、子どもが課題解決に向けて、自主的・主体的に学びながら、学びを仲間と相互補完し合える協同的な学びを展開できるようにすることを目指している。そのため、子どもが進んで取り組みたいと思えるような魅力ある活動として、様々な店を回りながら英語で買物をする活動を取り入れ、仲間と手分けしながら必要なものを買集める場を設定する。子どもが活動を繰り返し行うことにより、英語の音声や表現に慣れ親しんだり、英語と日

【 中学校 】

「小学校英語の導入と中学校との接続に関する研究」および教科研究「実践的な英語力の育成」とのかかわり

本科では、第2期教育振興基本計画で示された4つの基本的方向性の一つである、グローバル社会において様々な分野を牽引できるような人材を育てることに重点を置いている。特にこれからの変化の激しい社会の中では、国際舞台でより一層必要となる語学力やコミュニケーション能力などの育成に向けた多様な体験が重要視されている。この多様な体験の一つとして、同学年の気の知れた仲間とだけでなく、異学年や異校種の児童・生徒とコミュニ

本語に見られる共通点や相違点に気付いたりすることができる。また、相手とあいさつやお礼を交えた会話を設定し実際にそれに取り組むことで、相手を尊重することの大切さを実感することができる。さらに、コミュニケーションを図る楽しさを味わったり、英語学習の意欲を一層喚起したりすることができる。と考える。

ケーションを図るためには、より実践的な英語力が求められると考えている。そこで、本単元では、本校生徒にとって身近な存在でありつつも普段なかなか交流の機会がない附属小学校の児童との交流場面を設定する。

《 評価の観点 》

【 小学校 】	【 中学校 】
<p>【 評1 】 欲しいものとそれらの値段を伝え合う活動しながら、友達や中学生と積極的にコミュニケーションを図ろうとしている。</p> <p>【コミュニケーションへの関心・意欲・態度】</p>	<p>【 評1 】 欲しいものとそれらの値段などを伝えたり理解したりしながら、友達や小学生と積極的にコミュニケーションを図ろうとしている。</p> <p>【コミュニケーションへの関心・意欲・態度】</p>
<p>【 評2 】 欲しいものとそれらの値段を尋ねたり伝えたりするための英語の音声や基本的な表現に慣れ親しんでいる。 【英語への慣れ親しみ】</p>	<p>【 評2 】 欲しいものやそれらの値段など、尋ねられたことに対して適切に応答することができる。</p> <p>【外国語表現の能力】</p>
<p>【 評3 】 欲しいものとそれらの値段を尋ねたり伝えたりするための英語表現を理解したり、外来語と英語の音声上の共通点や相違点に気付いたりしている。 【言語や文化に関する気付き】</p>	<p>【 評3 】 相手にものをすすめたり提案したりする表現などを知っている。</p> <p>【言語や文化についての知識・理解】</p>

《 単元構想 》

【 小学校 】	【 中学校 】
<p>英語で買物をしよう。</p>	<p>英語でおもてなししよう。</p>
<p>● どんな英語を使えばいいのかわからない。</p> <p>● 慣れ親しんだ英語を生かせないと意欲を持続できない。</p> <p>● 普段接している友達とのコミュニケーションだけだと、あいさつやお礼の大切さの実感が足りない。</p> <p>Hello! Hamburger, please. How much? 1 dollar. Here you are. Thank you.</p>	<p>Hello! May I help you? What would you like? How many? Big or small? Here's your change. 1 dollar. Here you are. You're welcome.</p> <p>● これまでに学習してきた英語を実際に試す機会が少ない。</p> <p>● 英語を実際に使う場がないと、英語を使えるようにはならない。</p> <p>● 普段接している友達とのコミュニケーションだけだと、あいさつやお礼の大切さを実感しづらい。</p>
<p>☆ 英語を繰り返し聞いたり話したりする場を設定する。</p> <p>☆ 友達や中学生とコミュニケーションを図る場を設定する。</p> <p>欲しいものがあつたけど、英語が出てこなかったよ。</p> <p>買いたい食材を表す英語を覚えよう。</p> <p>「～ください」や「いくらですか」も英語で言いたい。</p>	<p>覚えた英語を実際に使うとどうなるか試したい。</p> <p>お客のニーズに丁寧に応えられるとすてきだね。</p> <p>☆ 場面に合わせて英語を活用する場を設定する。</p> <p>☆ 友達や小学生とコミュニケーションを図る場を設定する。</p>
<p>話すときにあいさつやお礼をすると礼儀正しくていいね。</p> <p>たくさん話したから買物するときの英語に慣れてきたよ。</p>	<p>相手の思いに応えられるような英語を選んで使うことが大切だね。</p> <p>より細かなニーズに応えられるよう、新しい英語もどんどん覚えよう。</p>
<p>いつか海外旅行や留学をするときに、実際に試してみたいな。</p>	

《 本時案 》 (小 5 / 5 , 中 3 / 3)

【 小学校 】	本時の目標	【 中学校 】
○ 欲しいものや値段を表す基本的な英語表現を繰り返し聞いた り話したりしながら、中学生と積極的にコミュニケーションを図 ることができるようにする。	○ 買物場面で用いられる初歩的な英語を、状況に応じて使 い分けることを繰り返ししながら、積極的にコミュニケーショ ンを図ることができるようにする。	

【 小学校 】 教師の支援 (☆) と評価 (◇)	学習活動 (○) と児童生徒の姿	【 中学校 】 教師の支援 (☆) と評価 (◇)
<p>☆ 子どもが見通しをもち主体的に学習を進めることができるように、本時における学習の流れを確認する場を設ける。</p> <p>◇ 欲しいものや値段を尋ねたり伝えたりするための英語の音声や基本的な表現に慣れ親しんでいる。 評2</p> <p>☆ 積極的に会話をしながら英語を繰り返し聞いたり話したりできるような場面設定を行う。</p> <p>◇ 欲しいものや値段を伝え合う活動しながら、中学生と積極的にコミュニケーションを図ろうとしている。 評1</p> <p>☆ コミュニケーションを図る楽しさを味わうことができるよう、活動時間を十分に保障する。</p> <p>☆ 活動への意欲を喚起することができるよう、積極的にコミュニケーションを図ろうとしている姿を取り上げ、紹介したり、称賛したりする。</p>	<p>○ 本時の学習の見通しをもつ。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;"> <p>買うものがたくさんあるから、グループの友達と手分けして色々な店を回ろう。</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;"> <p>学習してきた～、please. やHow much?等をどんどん使おう。</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;"> <p>欲しいものを英語でしっかり伝えないといけないな。</p> </div> <p>○ 英語で聞いたり話したりしながら、グループで手分けして欲しいものを買集めたり、売ったりする。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;"> <p>iPad で料理のレシピを見ながら、必要な食材を手分けして買集めよう。</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;"> <p>欲しいものが店にあるか店員さんに尋ねてみよう。 Do you have potatoes?</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;"> <p>予算内で買えるように、売り物の値段を尋ねないといけないね。</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;"> <p>じゃがいもは買えたから、次は牛肉だ。牛肉はどの店で売っているのかな。</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>中学生は個数も尋ねてくれたよ。新しい英語をどんどん学習すると、私たちも中学生のようになれるんだね。</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;"> <p>買い手役の小学生は英語の学習を始めたばかりだから、言いたいことや欲しいものを英語で聞き出すには中学生側の工夫が必要だね。</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>買い手のニーズに応えるために頑張ろう。</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;"> <p>買い手が購入したくなるように売り物をすすめてみよう。それに対して、買い手はどんな反応を示しているかな？</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>買い手が困っていたり、買い手の質問が理解できなかったりしたときは、どのように対応すればいいのだろうか。</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>ジェスチャーを入れてゆっくり繰り返したり、WBに図示したり、インフォメーション(お助け)コーナーを紹介したりすることが考えられる。</p> </div>	<p>☆ 本時の学習目標と学習の流れを再確認する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>(場面設定の例)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・市場のように、特定の食べ物や調味料などを専門に扱う店を中学生のグループ数分設定する。 ・グループで手分けして欲しいものを予算内で買集めるルールとする。 ・商品リストや値段は明示せず、店員に尋ねて初めて教えてもらえるルールとする。 </div> <p>☆ 積極的に会話をしながら英語を繰り返し聞いたり話したりできるような場面設定を行う。</p> <p>☆ 英語が苦手な中学生にはヒントを与える。</p> <p>◇ 相手が欲しいものとそれらの値段などを伝え合う活動しながら、小学生と積極的にコミュニケーションを図ろうとしている。 評1</p> <p>☆ 状況に応じて英語を使い分けながら積極的にコミュニケーションを図ることができるよう、活動時間を十分に保障する。</p>

<p>☆ これからも英語の音声や表現について気付いたり、英語でコミュニケーションを図る楽しさを味わったり、英語学習への意欲をいっそう喚起したりすることができるよう、感想を交流する場を設ける。</p>	<p>○ 活動の振り返りをする。</p> <div data-bbox="517 286 778 439"> <p>たくさん話したから買物するときの英語に慣れてきたよ。</p> </div> <div data-bbox="788 286 1053 439"> <p>相手の思いに応えられるような英語を選んで使うことが大切だね。</p> </div> <div data-bbox="517 452 1053 542"> <p>話すときにあいさつやお礼をすると礼儀正しいし、気持ちがいいね。</p> </div> <div data-bbox="517 555 778 698"> <p>英語で話しながらも中学生は親切にしてくれたのがうれしかったな。</p> </div> <div data-bbox="788 555 1053 734"> <p>小学生なのに一生懸命頑張っている姿は同じ学習者として手本にしなければいけないね。</p> </div> <div data-bbox="517 712 778 900"> <p>もっと英語を学習して、今日の中学生のようにいろいろなことを話せるようになりたいな。</p> </div> <div data-bbox="788 748 1053 891"> <p>より細かなニーズに応えられるよう、新しい英語もどんどん覚えよう。</p> </div> <div data-bbox="517 913 1053 1003"> <p>いつか海外旅行や留学をするときなどに、実際に英語で試してみたいな。</p> </div>	<p>☆ コミュニケーションを図ることの大切さや難しさを実感したり、英語学習への意欲をいっそう喚起したりすることができるよう、感想を交流する場を設ける。</p>
---	--	--

《 単元計画 》 【小学校】

ユニット1「買物をしてみよう」(1時間)

	学習活動 (○) と子どもの姿	教師の支援 (☆) と評価 (◇)
ユ ニ ツ ト 1 1 時 間	<p>○ 提示された料理に必要な食材・調味料を想起する。</p> <p>カレーライスだったら、米に、カレー粉に、じゃがいもに……。</p> <p>料理に必要な食材を買い集めないといけないよね。</p> <p>○ 世界各地の市場の様子を知る。</p> <p>市場で売っているのは、魚・野菜・果物ばかりだと思っていた</p> <p>市場には、いろいろな食材や調味料の専門店が並んでいるね。</p> <p>市場で買物をする、料理に必要な食材や調味料をそろえられそうだね。「活気」もあって楽しそう。</p> <p>中学生が店員役になっていっしょに学習するんだって。おもしろい学習になるね。でも、英語で買物をするってどんな感じだろう。</p> <p>○ 英語で買物をする。</p> <p>Potato, please. あれ、値段はどうやって尋ねたらいいのかな。</p> <p>カレー粉が欲しいんだけど、英語でどう伝えたらいいのだろう。</p> <p>欲しいものを買うことはなんとかできそうだけど、買物するときの英語がうまく出てこないね。</p> <p>○ 課題を明確にし、学習の見通しをもつ。</p> <p>カレー粉は普段英語で言わないから、すぐに出てこなかったよ。</p> <p>食材を表す英語と買物するときの英語をもっと覚えなないと。</p> <p>買物の学習を通して、中学生と気持ちよくやり取りできるといいな。</p>	<p>☆ 学習への興味・関心を喚起することができるよう、子どもに人気のある料理を提示し、それらを作るために買い集めなければならない食材・調味料を想起するよう促す。</p> <p>☆ 本単元における学習のイメージをもったり、世界各地に様々な市場があることに気付いたりすることができるよう、世界各地の市場の写真を提示する。</p> <p>☆ 学習への興味・関心を喚起することができるよう、中学生が市場を開いてくれることを知らせる。</p> <p>☆ 買物場面で用いられる英語を聞いたり話したりしながらコミュニケーションを図る楽しさを味わうことができるよう、スーパーやコンビニではなく、質問と受け答えが発生するような市場での買物場面を設定する。</p> <p>☆ 自ら学習の課題を見いだすことができるよう、外来語や既知の英語などを用いながら買物をするのを働きかける。</p> <p>☆ 学習の見通しをもつことができるよう、活動を通して感じた困難や、明らかとなった課題を交流し、それらに基づく学習計画を立てる場を設ける。</p>

ユニット2「英語を覚えよう」(3時間)

	学習活動 (○) と子どもの姿	教師の支援 (☆) と評価 (◇)
ユ ニ ツ ト 2	<p>○ 料理を作るための食材や調味料を表す英語や、欲しいものを伝えたり値段を尋ねたりするための英語を知る。</p> <p>カレー粉はcurry powderって言うのか。powderって言えばベーキングパウダーという粉があるよね。</p> <p>値段を尋ねるときは、How many?ではなくHow much?と言うのか。Howは同じだね。</p>	<p>◇ 食材や調味料を表す英語や、欲しいものを伝えたり値段を尋ねたりするための英語の音声に慣れ親しんでいる。 評2</p> <p>☆ 英語の音声を繰り返し聞いて真似する場を設ける。</p> <p>☆ 英語を繰り返し聞いたり話したりすることができるよう、ビンゴゲームや食材連想ゲームなどを取り入れる。</p>

3 時 間	<p>ピーマンは green pepper と いうのか。外来語と全然違う からしっかり覚えよう。</p> <p>新しい英語がパッと 出てくるようになり たいな。</p> <p>○ 英語を繰り返し用いる各種ゲームやロールプ レイブレイングを行う。</p> <p>英語を何回も繰り返し聞い たり言ったりすると、パッと 出てくるようになるね。</p> <p>覚えた英語でやり取り できるかな。ちょっと 試してみたいな。</p> <p>みんなとたくさん交流 して、英語を覚えて慣 れることができたね。</p> <p>中学生が開いてくれる お店に行って買物する 時間が楽しみだよ。</p>	<p>◇ 食材や調味料を表す英語の音声と外来語の音声と の共通点や相違点などに気付いている。 評3</p> <p>☆ 英語を聞いたり話したりする中で、外来語と 音声似ている英語、大きく異なる英語などにつ いて気付いたことを交流する場を設ける。</p> <p>◇ 欲しいものや値段を伝え合う活動をしなが ら、友達と積極的にコミュニケーションを図ろ うとしている。 評1</p> <p>☆ 店員役とお客さん役に分かれて行うロールプ レイングを取り入れる。</p> <p>☆ 合同学習の場で、班で協力しながら主体的 に学習を進めることができるよう、買い集める食 材を決め出したり、誰が何を買ってくるかなど を決めたりする場を設ける。</p>
-------------	--	---

ユニット3 「附属市場で買物をしよう」(1時間) 《本時》

	学習活動 (○) と子どもの姿	教師の支援 (☆) と評価 (◇)
ユ ニ ツ ト 3 1 時 間	<p>○ 英語で聞いたり話したりしながら、グルー プで手分けして欲しいものを買集める。</p> <p>iPad で料理のレシピを見 ながら、必要な食材を手分 けして買い集めよう。</p> <p>欲しいものが店にあるか 店員さんに尋ねてみよう。 Do you have potatoes?</p> <p>予算内で買えるよう に、売り物の値段を尋 ねないといけないね。</p> <p>じゃがいもは買えたから、次 は牛肉だ。牛肉はどの店で売 っているのかな。</p> <p>中学生は個数も尋ねてくれたよ。新しい英語をどん どん学習すると、私たちも中学生のようになれるん だね。</p> <p>○ 活動の振り返りをする。</p> <p>たくさん話したから 買物するときの英語 に慣れてきたよ。</p> <p>話すときにあいさつやお 礼をすると礼儀正しい し、気持ちいいね。</p> <p>英語で話しながらも中学 生は親切にしてくれたの がうれしかったな。</p> <p>もっと英語を学習して、今日 の中学生のようにいろいろ なことを話せるようになり たいな。</p> <p>いつか海外旅行や留学をするとき、実際に英語で試 してみたいな。</p>	<p>◇ 欲しいものや値段を尋ねたり伝えたりするた めの英語の音声や基本的な表現に慣れ親しんで いる。 評2</p> <p>☆ 積極的に会話をしながら英語を繰り返し聞い たり話したりできるような場面設定を行う。</p> <p>◇ 欲しいものや値段を伝え合う活動をしなが ら、友達や中学生と積極的にコミュニケーション を図ろうとしている。 評1</p> <p>☆ コミュニケーションを図る楽しさを味わうこ とができるよう、活動時間を十分に保障する。</p> <p>☆ 活動への意欲を喚起することができるよう、 積極的にコミュニケーションを図ろうとしてい る姿を取り上げ、紹介したり、称賛したりする。</p> <p>(場面設定の例)</p> <ul style="list-style-type: none"> 市場のように、特定の食べ物や調味料などを専門に 扱う店を中学生のグループ数分設定する。 グループで手分けして欲しいものを予算内で買い集 めるルールとする。 商品リストや値段は明示せず、店員に尋ねて初めて 教えてもらえるルールとする。 <p>☆ これからも英語の音声や表現について気付い たり、英語でコミュニケーションを図る楽しさ を味わったり、英語学習への意欲をいっそう喚 起したりすることができるよう、感想を交流す る場を設ける。</p>

◀ 指導計画 ▶ 【中学校】

スパイラルタイム

	学習活動 (○) と生徒の姿	教師の支援 (☆) と評価 (◇)
第1時	<ul style="list-style-type: none"> ○ 第1時から第3時までの学習内容を確認し、3時間の見通しをもつ。 ○ 第3時で扱う商品を英語で確認したり、買物の場面でよく使われる表現を想起したりする。 ○ 学習を振り返る。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>今までは買い手の立場だったが、ものを売るためにはもっといろいろな表現を知る必要があるようだ。もの名前や値段が言えるのはもちろん、ものをすすめたり、提案したりする言い方は、買物の場面でも使えることがわかった。</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> ☆ 第3時の小学生との合同授業に向けて学習のねらいを理解させて見通しをもたせる。 ☆ 辞書を活用して調べさせたり、買物の場面のやり取りを含むダイアログを読ませたりする。 ◇ 相手にものをすすめたり、依頼したり、提案したりする表現などを知っている。 評3

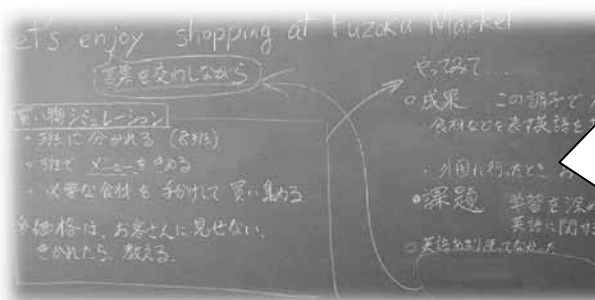
	学習活動 (○) と生徒の姿	教師の支援 (☆) と評価 (◇)
第2時	<ul style="list-style-type: none"> ○ 本時の学習の流れを確認する。 ○ 買い手と売りに分かれて買物のやりとりを行う。 ○ 活動を振り返り、次時の学習に向けて目標をもつ。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>小学生を相手にするときは、もっとわかりやすい英語を使わないといけない。ゆっくりはっきり繰り返したり、ジェスチャーやWBを使って視覚情報を与えたりなど。他にはどんなことが考えられるだろうか。</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> ☆ 英語を繰り返し聞いたり話したりできるような場面設定を行う。 ◇ 相手が欲しいものとそれらの値段など、尋ねられたことに対して適切に応答することができる。 評2

	学習活動 (○) と生徒の姿	教師の支援 (☆) と評価 (◇)
第3時 【本時】	<ul style="list-style-type: none"> ○ 小学生と合同授業を行う本時の学習の流れを確認する。 ○ 英語で聞いたり話したりしながら、買い手が欲しいものをすすめる。 ○ 買い手が欲しいものについて、値段やサイズなどを尋ねたりして、実際に買物のやりとりをする。 ○ 活動の振り返りをする。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>相手が言いたいことを理解しようとしたり、自分の言いたいことを分かってもらえたりするように努力することはとても難しいことが合同授業で分かった。でも、このような経験が将来実践的な場面で役に立つと思う。</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> ☆ 本時の学習に見通しをもたせる。 ◇ 相手が欲しいものとそれらの値段などを伝え合う活動をしながら、小学生と積極的にコミュニケーションを図ろうとしている。 評1 ☆ 買い手が困っていたり、買い手の質問が理解できなかったりするとき、どのように対応すればいいかヒントを与える。

「Let's Enjoy Shopping at Fuzoku Market!」授業記録 (小)

1h 活動との出会い (友達同士で買物をする) ~課題の明確化

ピーマンを探しているんだけど…
あれ？ピーマンありますか？って
英語で何て言うの？



欲しいものや値段も
そうだし、あいさ
つやお礼も英語で
パッと出てくると
いいよね。

- ☆ 中学生と合同で学習するという話を伝えたことで、学習への興味関心が高まりました。
- ☆ 世界各地の市場の様子を写真で見たことで、市場でのやり取りをイメージすることができました。
- ☆ いきなり「英語で買物をする」活動では、既知の英語や身振り手振り、指さしなどを駆使しながら活動を進めていました。しかし日本語を使わざるを得ない場面もかなりありました。
- ☆ 成果と課題を交流したことで、買物に必要な英語を覚えたり、英語でのあいさつやお礼なども交えたりしながら、言葉（英語）を交わしながら気持ちよくコミュニケーションを図りたいという思いをもちました。

2h 必要感に応じた学びの展開 (友達同士で英語を覚える)

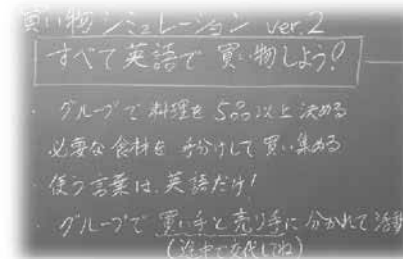


普段カタカナで表している
食材って意外と多いんだね。
英語を思い出すときのヒ
ントになるよね。



- ☆ 食材や調味料を表す英語として、外来語と英語でよく似た発音のものを多く設定したことで、自信をもって覚えることができました。また、外来語と英語の発音が大きく異なるものをチェックするよう促したことで、外来語と英語に見られる音声上の共通点や相違点に気付いたり、自分なりに気を付ける語を選び出したりすることができました。
- ☆ 言われた料理に必要な食材を班内で一人一人順番に言っていくゲームを行ったことで、食材や調味料を表す英語を繰り返し聞いたり言ったりすることができました。

3~4h 必要感に応じた学びの展開 (友達同士で再度英語で買物してみる)



欲しいものも英語で伝
えられるし、値段も尋
ねられるようになった
よ。中学生との学習が
楽しみだ！



- ☆ 覚えた英語を使いながら再度友達同士で買物をしたことで、英語の音声に慣れ親しむとともに、英語で聞いたり話したりすることへの自信をもったり楽しさを味わったりすることができました。
- ☆ 班で作りたいと思う料理を7品決めて、中学生との合同学習の際に誰がどの食材・調味料を買ってくるのかを相談する場を設けたことで、班で協力しながら主体的に学習に臨もうとする姿を見ることができました。

カリキュラムをつなぐ

～小学校英語と中学校「スパイラルタイム」の実践例～

岸田 直文

北海道教育大学附属旭川小学校

元島由香利

北海道教育大学附属旭川小学校

越野 崇

北海道教育大学附属旭川中学校

小野 祥康

北海道教育大学附属旭川中学校

1. はじめに

直山(2013)は、小中連携は「カリキュラムの連携」であるとし、その際重要なのは、「指導の継続性」、「目標の一貫性」、「学習内容の系統性」であると述べている。旭川キャンパスではこれまで、小学校において文字や3単現の表現をさりげなく導入したり、中学校ではLessonの導入場面でHi, friends!で扱っている教材や表現を積極的に活用したりするなど継続性のある指導に努めてきた。

本稿では、附属旭川小学校が1年生からの英語活動(授業)を独自のカリキュラムで進めてきた経緯と実践を紹介するとともに、それを中学校につなげる「スパイラルタイム」の試行について実践例を示しながら、成果と課題についてまとめていく。

2. 小学校英語のカリキュラムの経緯と考え方

附属旭川小学校では、平成13年度から総合的な学習の時間の中で「英語にかかわる活動」を位置付け、単元構成や活動を見直してきた。その後、英語を通して異文化に親しみながら、コミュニケーション活動を楽しむ「英語活動」の在り方について研究し、授業実践を積み重ねてきた。平成21年度からは、その研究の成果と課題を踏まえ、5・6年生については平成23年度からの学習指導要領に先行する形で年間35時間を確保し、「英語ノート」を活用して授業を実施してきた。また、1～4年生についても、早い時期から英語に慣れ親しむ必要があるという考えのもと、年間12時間の授業時数を確保するとともに、毎週木曜日に15分間の「朝の英語」を設定するなどして英語活動を実施してきた。

今年度からの研究開発学校指定にあわせ、3・4年生の時数を年間12時間から35時間へと増やして実施し、カリキュラム開発の糸口を探ってきた。次年度からは1・2年生の時数を年間12時間から17時間へ、5・6年生を年間35時間から70時間へと増やし、15分間の「朝の英語」についても、これまでと同様に実施する予定である。

2.1 「英語活動」にかかわる本校の児童の実態

附属旭川小学校の児童は、英語の授業に対する関心が高く、約9割の児童が英語の学習が好きと答えている。外国の人と話ができるようになりたい、もっと英語が話せるようになりたいと考えているだけでなく、文字に対する関心が高く、英語で書かれた単語や文を積極的に読んだり書いたりしようとする児童もいる。このような実態を生かして、高学年を中心にして英語で書かれた絵本を読むなどの新しい活動を取り入れる必要がある。

その一方で、「英語活動の授業がつまらない」と感じている児童が約1割おり、その理由として「知っていることばかりだから」「先生が何を言っているか分からない」「英語を覚えられない」などを挙げている。このことから、無理に英語を詰め込む指導は英語嫌いを助長したり、英語を覚えて書けるようにならなければいけ

ないといった認識をもたせたりすることのないよう、「楽しみながら自然と英語の力が身に付いていく」という本校のスタンスを大切にしながらカリキュラム開発に取り組んでいる。

2.2 カリキュラム開発のコンセプト

これまでの英語活動の取組や児童の実態を踏まえ、指導の系統性について一層考慮し、とりわけ高学年では、低学年での学習の単純な繰り返しにならないように、かつ児童の高い知的好奇心に応えられる活動を設定する。そのうえで、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の4つの技能を小学校の段階に合わせてバランスよく育成し、音声を中心としながら4技能を育成していくことができる活動の充実し、コミュニケーション能力の素地を養っていくことが重要である。具体的には、以下の基本方針に基づいてカリキュラム開発を行ってきた。

- ・6年間を通した系統性を一層考慮した内容配列にする。
- ・1・2年生は、中学年以上の活動の下地となる内容を扱う。
- ・3・4年生は、5年生で指導していた内容を主に扱う。
- ・5年生は、6年生で指導していた内容を主に扱う。
- ・6年生は、独自のカリキュラムを開発し、中学校との接続を意識した内容も一部扱う。
- ・アルファベットを用いて活動したり、簡単な英文を読んだりする活動を取り入れる。

2.3 カリキュラムの実際について

1・2年生では、歌やゲームに重点を置いた活動を通して、語句やリズムに慣れ親しむ活動を、3・4年生では、「Hi, friends! 1」の単元を中心に、友達や教師とのかかわりを重視した簡単な表現のコミュニケーションに慣れ親しむ活動を、5年生では、「Hi, friends! 2」の単元を中心に、様々な人とかかわりを重視した簡単な表現のコミュニケーションに慣れ親しむ活動を設定した。6年生では、様々な人とかかわりや国際理解にかかわる体験的な活動を通して、積極的に英語を聞きながら理解したり、知っている英語を話したりしながら積極的にコミュニケーションを図ることができる活動を設定した。加えて、中学校との接続を意識し、以下の4点のポイント（表1）を学習の中に取り入れることにした。

表1 小学校英語における学習のポイント

①フォニックス チャンツ	iPad や電子黒板を利用し、頭と心をリラックスさせることと、児童が知らないうちに単語の規則性などを身に付けることを目的として取り組む。
②iPad による個人練習	コミュニケーション活動に入る前に、これまでに学習した表現の定着を図る時間を設定する。iPad に大学と連携して作られたソフトを入れて、これまでに学習した単語や表現を個人のペースに合わせた練習に取り組む。
③コミュニケーション活動	コミュニケーション活動のポイントは、「相手に聞こえる声の大きさ」「相手が聞き取りやすい声の速さ」「相手の目や表情を確かめながら」の3点である。これらのポイントに加え、「身ぶりや手ぶり」「相槌を打つ」「分からないときは聞き返す」「理由を付ける」ことなども意識し、コミュニケーション活動が単なる形式的な内容になることがないように配慮する。
④文字や三人称の表現の取扱い	はじめのあいさつやコミュニケーション活動の後に、教師がさりげなく文字や三人称の表現を取り入れる。 例「T : What sports do you like? S : I like baseball. T : He likes baseball.」

3. 中学校の「スパイラルタイム」実践例

東村（2013）は、小中の円滑な接続のポイントについて、「外国語活動の把握と生徒の現状の見取り」、「音と文字のつながり」、「既習事項との2度目、3度目の出会い」を挙げている。その上で、オリエンテーションの時間で、具体的に生徒の姿をとらえるため、「外国語活動の取組の把握」、「生徒の英語の授業への期待度」、そして「取り組んできたことがどの程度理解できるか、使えるか」という視点をもつことが大切であると述べている。

そこで、附属旭川中学校の1年生では、小学校英語との円滑な接続を図り、聞くことや話すことなどを中心とした活動を通じて英語の運用能力を高める「スパイラルタイム」の時間を設定した。生徒の育ちや学びの連続性を重視して、小学校の英語活動の内容を振り返ったり、扱った表現を学び直したりする。極力、英語による授業を行い、英語をツールとして使用して、生徒が自分のことを表現したり、相手のことを理解したりするアクティビティ中心の授業とする。ここでは、入学時にオリエンテーションとして実践した5時間の「スパイラルタイム」と、授業の前半に帯時間的に配置した「スパイラルタイム」の2つを紹介する。

3.1 入門期における「スパイラルタイム」

オリエンテーションにおける「スパイラルタイム」では、小学校英語で扱われている表現をどんどん使わせる時間にする。「聞くこと」や「話すこと」などのコミュニケーション活動をしながら、生徒に小学校での学びを想起させる。その際、

- ・小学校英語を学習してきた学習者群（附属旭川小出身）と外国語活動を学習してきた学習者群（公立小学校出身）とをうまく融合すること
- ・触れてきた活動と表現の確認と外国語活動で使用してきた表現の定着を図ること
- ・文字や文法の扱いについては慎重に導入すること

という3つの点に配慮しながら、小学校で慣れ親しんできたことや取り組んできたことがどの程度理解できるかを把握するため、小学校の学習内容から Can-Do リストを作成した（表2）。

表2 「スパイラルタイム」オリエンテーションの Can-Do リスト

【聞くこと】
1□ 基本的な英語の音声の特徴をとらえて、正しく聞くことができる。
2□ 自然な口調で話されたり読まれたりする簡単な英語を聞いて、情報を聞き取ることができる。
3□ 相手のできることを聞き取ることができる。
4□ 道案内の英語を聞いて、場所にたどり着くことができる。
5□ 相手が行きたい場所について聞き取ることができる。
6□ 友達の将来の夢について理解することができる。
7□ 友達の一日について聞き取ることができる。
【話すこと】
8□ 基本的な音声の特徴をとらえて、正しく発音することができる。
9□ 自分のできることを表現したり、相手のできることをたずねたりすることができる。
10□ 相手に道順を聞いたり、道案内したりすることができる。
11□ 自分が行きたい国を述べたり、相手の行きたい場所について質問したりすることができる。
12□ 自分の一日について表現したり、相手の一日を英語で質問したりすることができる。
13□ 自分の将来の夢について話すことができる。
【読むこと】
14□ 日常生活の身近な英語を理解することができる。
15□ 日常生活の身近なことをあらかず簡単な文を理解することができる。

【書くこと】
16□ アルファベットを活字体で書くことができる。
17□ アルファベットの太文字や小文字、符号を適切に使うことができる。
18□ 自分の名前を英語で書くことができる。

このリストをもとに、Hi, friends!を踏まえた5時間分の指導計画（別表1）を作成し、指導する中で生徒自身が何ができるのかを自己評価する場面を設定した。なお、Can-Doリストに沿って評価させるときには、1つの項目について1回ではなく、複数回チェックできるようにし、1回目は感覚で分かっているか、2回目以降は実際に話してみたり書いてみたりして、できるかどうかを確かめさせるようにさせた。チェックの方法は、その時間にとってもよくできたと思った場合には「◎」を、概ねできたと思った場合には「○」、そしてあまりうまくできなかった、自信をもって取り組めなかった場合には「△」を、毎時間つけさせた。

1時間目は、Can-Doリストの説明や指導そのものに時間がかかってしまったため、終了時に1, 2, 3, 5, 8, 9, 11（番号は表2を参照）の7項目についてのみチェックさせた。「スパイラルタイム」では、学習者の小学校時代に培った英語力の違いが授業にどう反映され、その差をどう埋めていくかが研究の大切な視点となることから、附属小出身の生徒と公立小出身の生徒でCan-Doリストの項目で「◎」をつけた割合を比較したところ、表3のように、すべての項目において附属小出身のほうが公立小出身を上回った（附属小出身：N=72、公立小出身：N=48）。

表3 「スパイラルタイム」オリエンテーション1時間目のCan-Doリストで「◎」をつけた割合（%）

項目	1	2	3	5	8	9	11
附属小	54	79	58	63	54	50	42
公立小	44	63	50	31	38	38	31

さらに、オリエンテーションの残りの時間を指導計画にもとづいて指導したところ、この7つの項目については、約3～5割の生徒が「△」から「○」、もしくは「○」から「◎」へ変化した。また、オリエンテーション終了後、アルファベットを正しく発音したり（Can-Doリストの項目8番の一部として）、ALTに自己紹介をしたり（同8番、9番、11番の一部として）するなどのパフォーマンステストを実施し、評価基準「A」の生徒がアルファベットの発音では71%、自己紹介では100%となった。

残りの項目も含め、不足している部分や弱いところをもとに、帯時間としての「スパイラルタイム」でこれらの表現をたくさん活用し、Can-Doリストの全ての項目に「◎」がチェックされることを目指して指導することとした。

3.2 授業の前半に配置した「スパイラルタイム」

毎時間の授業の最初に、いわば帯時間的に「スパイラルタイム」を配置し、Hi, friends!の活動を使って導入したり、QAリストを作成してそれにもとづいて簡単な会話を継続させたりするなどの実践を行いながら、小学校で慣れ親しんだ表現を聞いたり話したりする活動を積み重ねてきた。

例えば、7月には、He/Sheなどの人称代名詞を用いて、クラスメイトにインタビューをし、その人について紹介する英語の文章を作成する活動を行った。本時では、帯時間の「スパイラルタイム」として、前述の「スパイラルタイム」オリエンテーションの5時間で用いたり、これまで中学校で学習したりした表現を、ペアで会話する中で疑問文や答え方を確認した。次に、同じペアで自分のクラスメイトについてお互いにインタビューをさせ、それをもとに紹介する英文を書かせた。インタビュー活動の導入に当たっては、一問一答形式ではなく、なるべく会話が続くようなストラテジーを提示したり、使えそうな表現の場面や機能についても考えさせたりした。ワークシートに書かせたものを集めたところ、結果として約7割の生徒が目標通り7文以上の紹介文を書いていた。クラスメイトについていざ書こうとするとなかなか細かい内容が思いつかなかったりする場面も見られたが、インタビューにおいて普段から帯時間としての「スパイラルタイム」でペアとやりとりを

している成果が発揮され、書こうとする視点や表現が想起されたと思われる。

3.3 Can-Do リストをもとにした実践の考察

3. 2のように、帯時間としての「スパイラルタイム」をしばらく実践してきたが、8月にオリエンテーションで用いた Can-Do リストと同じ項目をチェックさせたところ、18項目のうち1項目をのぞいて、「◎」もしくは「○」をつけた割合が80%以上となった。また、4月段階と同じ1, 2, 3, 5, 8, 9, 11の7つの項目だけを附属小出身、公立小出身の生徒に分けて割合を比較したところ、表4のように、4つの項目において公立小出身者の「◎」をつけた割合が附属小出身者にせまるもしくは上回る結果となった。

表4 8月段階でオリエンテーション時の Can-Do リストに「◎」をつけた割合 (%)

項目	1	2	3	5	8	9	11
附属小	92	92	67	71	83	75	46
伸び	+38	+13	+9	+8	+29	+25	+4
公立小	81	94	56	75	81	69	50
伸び	+37	+31	+6	+44	+43	+31	+19

このことから、日々の授業を通して、オリエンテーション時の各項目が自信をもってできるようになった生徒が増加し、附属小出身者と公立小出身者の違いもそれほどなくなっているのがわかる。しかし、これはあくまで生徒の「自信の度合い」を数値化したものであり、統計学的な処理も行っていないため、「スパイラルタイム」の効果について検証するには、他にもさらに様々なデータの収集が必要である。今後、児童英検 Gold をなどの外部検定を活用し客観的に力を測定するとともに、パフォーマンステストを数回実施して比較分析するなど、Can-Do リストそのものの信頼度などについても検討していかなければならない。

4. まとめ

これまでの実践研究の成果と課題は次の通りである。まず、成果については、小学校の英語カリキュラム開発においては、6年間を通した系統性を一層考慮した内容配列にし、実践を進めることによって、簡単な単語や挨拶などのフレーズが授業の中で何度も繰り返されることで自然と定着する児童が増えてきた。また、5年生後半から6年生にかけて、文字を導入することで、「英語の音声とともに文字を目にすることで、英語に一層興味をもつことができる」「2語以上のフレーズを児童に聞かせる際、イラストに文字を添えることで、後から英文を思い出す際の手がかりが増える」「中学校英語の文字指導の素地を養うことができる」といった手応えを得ることができた。

次に、中学校の「スパイラルタイム」の実施については、小学校英語の内容を踏まえた Can-Do リストを用いることで、入門期の生徒の実態を把握し指導に生かすことで、小学校で学んできた表現を8月ぐらいまでに、様々な学校から入学してきた生徒のほぼ全員が高い確率で定着させることができることが分かった。また、「スパイラルタイム」において Hi, friends! で扱われている場面や言語材料等を使用することで、中学校の初期の段階では扱わない文構造なども使用可能となり、より豊かな言語活動ができた。さらに、この時、文構造に応じた場面や機能に注目させることができ、コミュニケーションに資する文法指導が可能となった。

課題としては、附属旭川小学校で次年度から進める高学年70時間分のカリキュラムの完成と中学校を見据えた目標設定を進めていくことである。中学校では「スパイラルタイム」の指導計画と指導方法を確立するとともに、小学校とともに協同して Can-Do リストの信頼性の向上及び小学校の新しいカリキュラムに対応した見直しが必要である。

参考・引用文献

清田洋一 (2013) 「授業で英語を多く使うために：行動志向的アプローチのすすめ [10] ～教科書に基づく1年間の指導の達成目標と CAN-DO リスト」『英語教育・2013年1月号』大修館書店

直山木綿子（2013）「新学習指導要領での外国語教育の課題」,『指導と評価』2013年4月号 図書文化 pp.46~48

東村広子（2013）「小中の滑らかな接続を目指して」『英語教育 2013年3月号』大修館書店

萬谷隆一 直山木綿子 卯城祐司 石塚博規 中村香恵子 中村典夫 編著（2011）『小中連携 Q&Aと実践』開隆堂

文部科学省（2008）『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』東洋館出版

文部科学省（2008）『中学校学習指導要領解説 外国語編』開隆堂出版

別表1 中学校オリエンテーション時における「スパイラルタイム」の指導計画（5時間分）

【1時間目】英語で言えるものを探そう
<ul style="list-style-type: none"> ・英語でのあいさつの仕方を学ぶとともに、Can-Doリストで学習の見通しをもつ。 ・教師の自己紹介を聞き、好きなもの、できること、行きたい国について聞き取る。 ・自分の名前を英語で書いたり、また簡単な自己紹介を日本語で書き、英語でどのように表現するかを考えたりする。 ・アルファベットの大文字を確認したり、教科書で学習する15個の英単語のうち、どれだけ言えるかをチェックしたりする。英語特有の発音などについても意識する。 ・他に言えるものがあれば確認する中で、教師が個数をたずねたり説明を加えたりする。
【2時間目】英語を聞いてみよう
<ul style="list-style-type: none"> ・日付、数字の言い方を確認する。（数字ゲーム） ・教師の自己紹介を聞き（名前のスペリング、誕生日、将来の夢）、情報を聞き取る。 ・誕生日をたずねたり、将来の夢について話したりするにはどのように言うかを確認する。 ・様々な場面において、英語で何と言うか確認する。 ・対話文を聞き、教科書の絵の中から適するものを選び、表現を確認する。 ・英語の表現を文字にしたものを見て、音声と綴りの関連について関心をもつ。
【3時間目】アルファベットを学ぼう
<ul style="list-style-type: none"> ・教師の一日について、話される英語を聞き、内容を理解する。 ・自分の一日について述べるには、どのように言えばよいかを考える。 ・アルファベットの大文字と小文字をどのように使うか確認し、文字を書く練習を行う。 ・教師の一日について文章にしたものを読んで、文字についての関心を高める。
【4時間目】単語を聞いて発音してみよう
<ul style="list-style-type: none"> ・時間をたずねたり答えたりする練習、自分の一日について話す練習をする。 ・教科書の単語を聞き、発音したり書いたりする。 ・誕生日や好きなこと（もの）、できること、行きたい国、将来の夢等を入れた自己紹介の練習をする。
【5時間目】自己紹介を聞こう
<ul style="list-style-type: none"> ・教科書の自己紹介を聞く。 ・出身を言ったり好きなこと（もの）について述べたりする表現を確認する。 ・前時を想起しながら、誕生日や好きなこと（もの）、できること、行きたい国、将来の夢等を入れて自己紹介できるように練習する。 ・自己紹介をしたり、自己紹介したこと（名前）を書いてみたりする。

子どもをつなぐ
～スノーマン・プロジェクト、ICTを活用した授業の実際～
「わくわく！スノーマン・プロジェクト」
「どきどき！英語変換チャレンジ」の実践を通して

津田 裕匡

北海道教育大学附属釧路小学校

若林 幹浩

北海道教育大学附属釧路中学校

1. はじめに

外国語の知識基盤社会の進展，グローバル化を背景に，国際社会において子どもたちが主体的に活躍するためには，幅広い知識と柔軟な思考力に基づいて新しい知や価値を創造し，発信できる能力の形成が重要である。その前提となるのが外国語の能力であるが，情報活用能力も，高度情報通信技術社会において，必要不可欠な能力となっている。

情報通信機器の発達により，学びの方法も多様になってきている。子どもたち一人一人の能力や適性に応じた個別の学び，距離の離れた子ども同士が学び合う協働的な学び，時間を気にせず先生から指導を受けたり，指導者同士が交流したりする学びが可能になってきている。まさに，「学びのイノベーション」である。

本学は，距離の離れた8附属小・中学校を有している。このメリットを生かし，タブレット型PCやスカイプ，音声認識ソフト等のICTを利用しての交流学习を積極的に導入することで，子どもたちのコミュニケーション能力がどのように向上するかを調査している。具体的にはICT機器を活用し，附属小学校間をつなぎ，英語を使用して協働学習を行ったり，交流活動や発表活動を行ったり，海外の学校と連携し，文化的背景の異なる子どもたちと電子メールやスカイプ等を利用しての交流を行ったりして協働学習の在り方について研究を今年度より進めている（スノーマン・プロジェクト）。

また，その他の「学びのイノベーション」の利用として，アップル社のiOSに搭載されているsiriに代表される音声認識ソフトの利用とその効果についても研究を試みた。iPadを利用して，発音した英語が正しく文字に変換されるかを体験させるとともに，音声と文字の関係を体感させる取組を行った（どきどき！英語変換チャレンジ）。

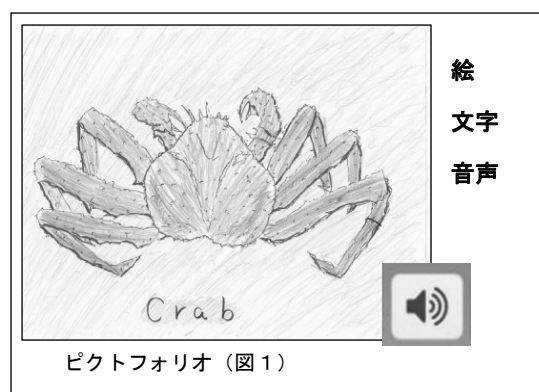
本稿では，「スノーマン・プロジェクト」として「わくわく！スノーマン・プロジェクト」，ICT活用の授業の実際として「どきどき！英語変換チャレンジ」の実践についてまとめていく。

2. スノーマン・プロジェクト

2.1 「わくわく！スノーマン・プロジェクト」とは

「スノーマン・プロジェクト」という言葉には，雪を少しずつ集めて雪だるまを作っていくように，こつこつと積み重ねた学びが大きくなっていく充実感や，仲間との協働により，学びを大きくしていくことの楽しさを子どもたちに実感してもらいたいという思いが込められている。

本稿で取り上げる「わくわく！スノーマン・プロジェクト」では、子どもたちに言語や文化への体験的な理解と4技能の統合的な能力を育成する学習活動として、ピクトフォリオづくりを行うものである。ピクトフォリオとは、ピクチャーとポートフォリオを繋げた造語であり、子どもが調べた英語の単語や表現を、自分自身の絵と組み合わせて書いたカードを意味する（図1）。このカードをPDFファイルやJPGファイルとしてWeb上にアップロードして、蓄積型発展教材（スノーマン）



ピクトフォリオ（図1）

を作っていく。8附属小中学校の子どもたちがそれぞれに作成したカードは、雪だるまのようにどんどん大きくなっていき、いつでも、誰でも、どこからでもアクセスできるデータベースとなっていく。

それらのカードを「たべもの」「スポーツ」「日常のあいさつ」「教室の中にあるもの」「将来なりたい職業」「冬のイメージ」「自己紹介のときに使える表現」「家族を紹介するときに見える表現」などにカテゴリー分けすることで、同じような活動をしようとしたときに、児童や生徒が自由に参照できるようにしておく。単語や英文だけではなく、絵が添えられているために理解がしやすく、興味も湧きやすい。さらに、自分が調べた英語がそこにはない場合には自分で作って登録することができるので、児童生徒の活動意欲につながることも期待できる。

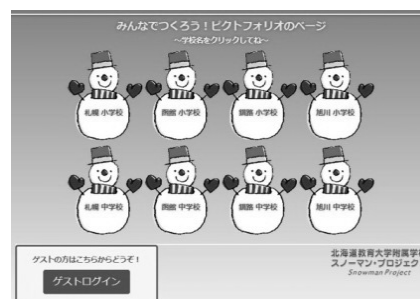
ピクトフォリオには作成した児童生徒の思いを書き添えたり、利用した児童生徒がサンキュー・メッセージを添えたりすることも可能である。これが学びのフィードバックとなり、「スノーマン」を無機質なデータベースではなく、インターネットの向こう側にいる人の想いを受け止めて、人と人との確かなつながりを実感できる「コミュニケーション・データベース」とすることができる（2.2 図4 参照）

副次的な側面として、子どもたちの異文化理解が深まることも期待できる。例えば「冬のイメージ」というカテゴリーでは、同じ英単語でも、札幌の子どもたちのイメージと釧路の子どもたちのイメージ、あるいは韓国の子どものイメージが異なることが、描かれた絵によって視覚的に理解できるからである。

ピクトフォリオだけではなく、ビデオレターや動画も登録可能とする。これにより、中学生から小学生へのメッセージ、小学生から中学生への show & tell、附属小学校対抗英語劇発表会など、児童生徒が楽しく、空間を超え、時間を超え、年齢を超え、つながりを実感しながら交流学习していくことができるであろう。今年度から始まった取組ではあるが、今後より多くの学習の可能性を秘めていると考えている。

2.2 「わくわく！スノーマン・プロジェクト」操作の実際

今年度、試験的に取り組んだ「わくわく！スノーマン・プロジェクト」とその操作について紹介する。この「わくわく！スノーマン・プロジェクト」のwebページは、誰でもアクセスすることができる。webトップページ（図2）から、ログインすると、ジャンルや索引画面が現れ、見たいピクトフォリオを自由に選ぶことができる。（図3）前述したとおり、ピクトフォリオには、児童生徒が描いた絵、文字、音声があり、その音声を何度でも自由に聞くことができる。また、



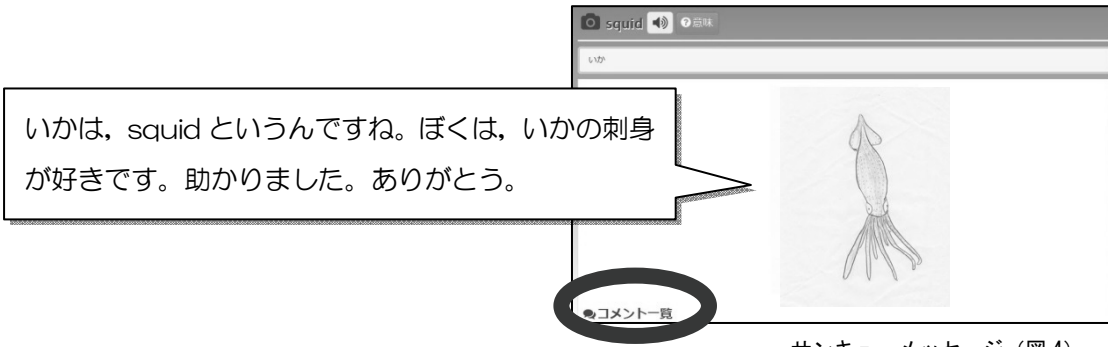
Web トップページ（図2）

その意味も調べることができるようになっている。

これらのピクトフォリオには、利用した児童生徒がサンキュー・メッセージ（図4）を添えることが可能である。このメッセージが、学びのフィードバックとなり、「スノーマン」を無機質なデータベースではなく、インターネットの向こう側にいる人の想いを受け止めて、人と人との確かなつながりを実感できる、「コミュニケーション・データベース」とすることができると考えている。



ジャンル別のページ（図3）

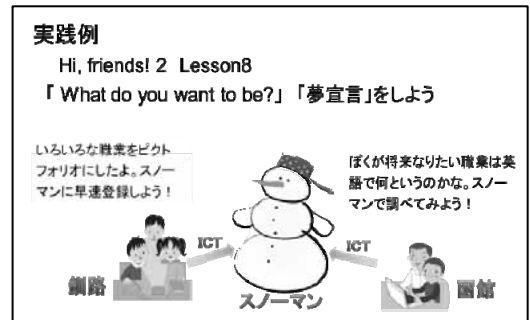


サンキューメッセージ（図4）

2.3 実践活用例

たとえば、次のような実践が考えられる。

Hi, friends! 2 Lesson8 の「What do you want to be?」「『夢宣言』をしよう」では、自分の将来の夢を紹介するという活動が設定されている。この学習の際に、自分がなりたい職業をピクトフォリオにして登録をしたり、逆になりたい職業を調べてみたりする活動が考えられる。これらを他校間で交流することで、学習に対する有用感が生まれ、興味関心を高めるものとなる。図5の例は、釧路校の児童が登録した「職業」のピクトフォリオを函館校の児童が、調べ学習に活用した例である。

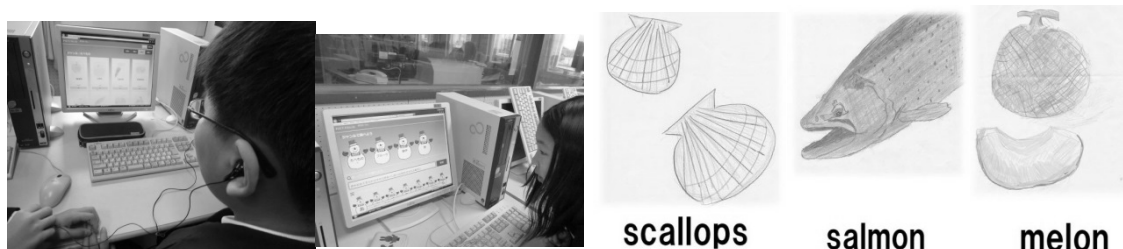


実践例（図5）

また、次のような活用例も考えられる。

- 釧路の名物を紹介しよう。
⇒「さんま」「ざんぎ」「霧」って英語でなんて言うのか調べてみよう。
- 身の回りにあるものでクイズを作ろう。
⇒クイズを動画にしてUPしよう。みんなで協力してビデオを撮影しよう。
- 会話を長く続けてみよう
⇒見えそうなあいさつの表現を調べてみよう。ジェスチャーも見てみよう。
- かるた大会をしよう
⇒自分たちが作ったピクトフォリオをかるたにしよう。
- 〇〇動物園にいる動物を紹介しよう。
⇒釧路動物園にいる動物をみんなで調べて、スノーマンにアップしよう。

今後、児童・生徒の実態を把握しながら、活用例を実践していきたい。



児童の学習の様子と児童が描いたピクトフォリオの作品

2.4 今後の展望

現在は、試行段階である。その中でも、このサイトにアクセスした児童は、自分の描いた絵がアップロードされていることに喜びを感じ、その音声を繰り返し聞き姿や笑顔で作品を批評し合う姿も見られた。また、新しいピクトフォリオを作成したいと申し出た児童も多かった。今後は、様々なピクトフォリオを集め、アップロードしていきたい。今後も様々なジャンルを増やしたり、実践例を集めたりしながら、よりよい教材として改良を加え、全国の児童・生徒が活用できるものにしていきたい。

また、学級の紹介や住んでいる町の紹介、メッセージビデオ、学習の様子などの動画もアップロードすることで、さらに活用の幅が広がると考える。

今後も、このスノーマン・プロジェクトを活用しての学習活動に取り組み、その成果と課題を検証していきたい。

3. ICTを活用した授業～「どきどき！英語変換チャレンジ」～

3.1 「どきどき！英語変換チャレンジ」とは

「どきどき！英語変換チャレンジ」は、文部科学省研究開発校として現在取り組んでいる内容のうち、先に述べた、英語教育を効果的に進めるための「学びのイノベーション」の研究内容にかかわる実践である。この研究実践は、ICT機器を活用した「学びのイノベーション」推進において、児童や生徒が特に、音と文字の関連を実感しながら学ぶことのできる環境づくりとして位置づけられている。

この実践では、アップル社の iOS に搭載されている siri と呼ばれる音声認識による操作補助機能を利用しながら、生徒が iPad に向かって英語を話し、自分たちの英語が認識され、正しく変換されるかどうか挑戦するものである。学習者にとっては、ALT や英語の指導者がいない場面でも、自分の発する音声、英語として認識されるのかどうかを知ることができる一つの学習手段となり、音声と文字の関係を知る機会となると考えた。またこのことが、学習者である生徒たちにとって興味深い活動となり、音声面や文字認識の学習における意識に対してどのように働いたかを検証していく。

3.2 「どきどき！英語変換チャレンジ」の実践

3.2.1 活動の準備

始めに英語を認識できるようにするため、siri の認識する言語を英語に設定する必要がある。スタートの画面で、設定のアイコンをタップし、siri に関わる部分をタップすることで、言語の設定を行う画面



図6 言語選択の画面

が表示される。言語をタップし、各種言語から英語を選択してタップすることで、英語を音声認識できるようになる（図6）。生徒たちは各自この操作ののち、実践に取り組んだ。

次に、認識した英語を自分たちで確認しやすくするために、

スタート画面にある「メモ」をタップして起動させた。メモは、iPadに付属しているソフトで、メモを開いて音声を認識すると、図7のように文字として確認することが可能となる。

メモを開いたら、画面上のキーボードを英語の入力モードにし、マイクの絵のキーをタップすることでsiriが起動し、英語音声を認識できる状態となる。これらの準備を「どきどき！英語変換チャレンジ」の活動を実際に行う前に生徒と確認しながら実施した。

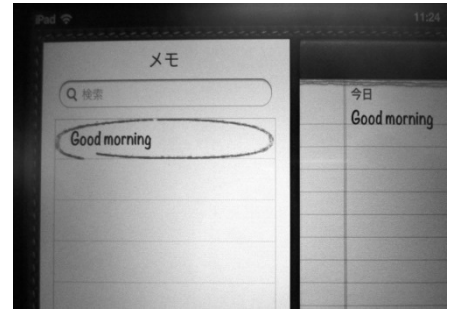


図7 音声で認識されたメモの画面

3.2.2 活動の実際

実践は、第1学年の3学級101人を対象に実施した。また、この時間は、研究開発校の取組の一環であり、中学校においてカリキュラム開発を行っている、「スパイラルタイム」の1時間分として設定した。

本校生徒は6月中旬に各学年・各学級で行われた「iPad講習会」を受講し、iPadの基本的な操作方法については学んでいる。そのため、日本語の音声認識機能については使用したことがある。しかし、授業前に生徒にたずねたところ、ほとんどの生徒は英語での音声認識機能は使ったことがないということであった。授業の導入場面で、「どきどき！英語変換チャレンジ」に取り組むことを伝えた際、生徒達は、「そういうこともできるんだ。」「あー、おもしろそう。」「できるかなあ。」と、期待と若干の不安が入り混じったような表情を見せながら取組を始めた。



まず手始めに、教科書であるSunshine English Course 1 Let's start2「身の回りにあるものの英語」、Program1「アルファベットが表わす音を聞いてみよう」にある「アルファベットが表わす音を聞いてみよう」から、単語単位（例：apple bag cat dog pen など）で試してみる活動を行った。iPadと教室のテレビをつなげ、まず教師が手本を何度か提示したうえで、生徒に試してみるよう指示した。生徒たちは神妙な面持ちで活動を開始したが、自分の話した英語が認識されはじめると、喜びの声や歓声が教室中で上がる状態が見られた。



次に、第1段階で認識させる操作に十分慣れた後、第2段階として、生徒たちはProgram2「アメリカからの転校生」に出てくる、Hi! Hello. Good morning. Thank you. Nice to meet you. などのような簡単な自己紹介や、Do you～? や Are you～? What や How などを用いた疑問文へと取り組んだ。



最後に、まとめとして、実践の時点で既習の基本文形を用いた文単位での認識に挑戦した。文の種類としては、一般動詞や be 動詞を使った肯定文、疑問文、否定文や、疑問詞を用いた疑問文、命令文（例：I play the piano. Do you like Japanese food? What do you like? I don't like vegetable juice.など）にも取り組んだ。中には、なかなか認識されずに何度も繰り返し挑戦し試行錯誤する姿や、近くの級友と音声認識の結果を見せ合いながら活発に交流する姿などが見られた。本授業を実施した教室では、おおむねほとんどの生徒が興味をもって活動に取り組んでいる様子が見られた。

3.3 振り返りアンケート調査の結果から

3.3.1 アンケート調査の数値から

活動終了後に、生徒の英語学習における音声に対する意識について見取るために、図8のアンケート調査を実施した。アンケート調査には、5つの音声学習にかかわる質問項目に、4がよくあてはまる、1がほとんどあてはまらない、の4段階で回答するものと、本時で気が付いたこと、学んだことや感想を記述する欄を設けた。

表1は、質問項目別に、回答の平均値をまとめたものである。質問項目別に見ていくと、1番目の「自分の発音について確認することができた」については、客観的に発音の良し悪しを確認できる機会であるにとらえた生徒が多かったためか、比較的高い数値を示している。それに対し2番の、「自分の発音に自信を持つことができた」は、2.52と最も低い数値を示した。やはり、スムーズに認識されるものばかりではなかったり、何度挑戦してもなかなか認識されなかったりする様子も見受けられ、チャレンジはしたが、発音に自信を持つまでには至らなかった生徒も見られる結果となったと考えられる。質問項目3については、質問項目中、最も高い平均値を示した。このことは、今回の学習が、音声面での学習に対する意欲づけに一定程度貢献したのではないかと考えられる。質問項目4・5については、それに次いで高い数値を示した。これらのことから、今後の音声面における向上を目指そうとする意欲、並びに音声に関する学習の方法について、一定程度、生徒の興味関心を引き上げることができたと考えられる。

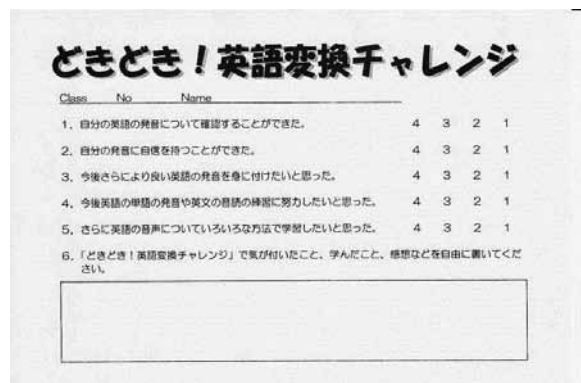


図8 振り返りのアンケート調査用紙

表1 振り返りの項目と自己評価の平均値（4段階評価）

No	質問項目	平均値
1	自分の英語の発音について確認することができた	3.27
2	自分の発音に自信を持つことができた。	2.52
3	今後さらにより良い英語の発音を身に付けたいと思った。	3.78
4	今後英語の単語の発音や英文の音読の練習に努力したいと思った。	3.69
5	さらに英語の音声についていろいろな方法で学習したいと思った。	3.61

3.3.2 生徒の振り返りから

図9～11は、記述による生徒の振り返りからの抜粋である。図9の振り返りからは、自分の発音を変換されるように試行錯誤しながら取り組んで正しく変換されたことや、その経験を今後の発音にかかわる学習につなげていこうとする姿勢が見られる。また、図10の振り返りからは、自分の発音が認識されずに困難を感じているが、認識されるものとされないものの差を区別しながら取り組んだことなど、困難を感じながらも自己の課題を分析的に振り返っていることがうかがわれる。図11の記述からは、音声面での学習を行う新しい方法・手段について、考えたり、興味関心を持った様子がわかる。「まったく認識されず残念だった」という記述が数名に見られたことも事実だが、全体的には、ほとんどの生徒が肯定的な記述をしていた。

自分の発音が英語に変換されていて、自分の発音に自信を持てた
発音が違えば変換されて発音を変えて変換されたので
これからの授業で発音に気を付けて学習していきたい

図9 生徒による振り返りの記述①

うまく認識されている単語と、うまく認識できない単語・文があったので、これASの授業で発音に気を付けて学習していきたいです。

図10 生徒による振り返りの記述②

楽しく発音を正確にできる事ができた。うまくなった。正確さが足りない。これから発音についていろいろな方法を学習していきたいと思ってる。

図11 生徒による振り返りの記述③

3.4 今後の展望～成果と課題

今回の実践における成果としては、生徒の音声面での学習における意欲づけへとつなげることができたことや、生徒に音声面の学習を行う方法について新たな視点を与え、さらなる学習法を求めようとする関心を一定程度高められたことがあげられる。一方、課題としては、クラスで一斉に実施すると、周囲の音が認識を妨げることがあり、より良く認識される環境を作りながら実施すること、また認識されることが全てではない、唯一絶対の英語の発音の基準ではないということを生徒に理解させながらも、さらなる意欲へつなげる手立てを講じながら実施することなどが挙げられる。今後も iPad を使用する機会を持ち、その際に以前の自分の発音との違いはどうか、自己の成長の度合いを見取るための目安の一つとして使用することで、英語学習、特に音声面での意欲づけやコミュニケーションの媒介としての英語を、同じくコミュニケーションの媒介となりうる機器で用いることへの感覚を身に付け、有用性を理解する機会の一つとしていきたいと考えている。

4. まとめ

「わくわく！スノーマン・プロジェクト」では、ピクトフォリオを作ることで、児童生徒の学習成果を蓄積型発展教材としてデータベース化するスタートを切ることができた。これを授業づくりに活用したり、児童生徒が調べ学習や交流学习に活用したりできるようにした。これによって、子どもの文字への関心を高めたり、「読むこと」「書くこと」に取り組む意欲を高めたりすることにつながると考えている。今年度始めたばかりの取組であるが、実践を重ねながら改善していきたい。

「どきどき！英語変換チャレンジ」の実践では、学びのイノベーションの一環として、ICTを用い、子どもたちが音と文字の関連を実感しながら主体的に学ぶことのできる環境づくりに向けた可能性を探ることができたと考えている。今後、音と文字の学習に対する意欲向上やより良い学びを目指し、iPad は言うまでもなく、他の ICT 機器を様々な形で活用した授業実践を蓄積し、効果的な学習形態を取り入れた授業開発等にも取り組んでいきたい。

参考文献

萬谷隆一・直山木綿子・卯城祐司・石塚博規・中村香恵子・中村典生(2011). 『小中連携 Q&A と実践』開隆堂。